

『地学雑誌』——創刊（明治二十二年）より関東大震災まで

日本の近代地理学の系譜研究 資料第三

石田 龍次郎

日本の現在の地理学をみるために、過去百年間、日本の地理学はいかに発達したかを資料的に調えるのが、一連の本稿の目的である。今までに（一）明治維新直後から太政官地誌課、後の内務省地理局によって企画された「皇国地誌」の編纂は中央集権的、中国的史官意識の下に進められ、ついに明治二十年代半ばに挫折したこと、次に（二）西欧社会の地理学協会を模して明治十二年創立された東京地学協会は、日本人による海外知識・地理的情報の収集、とくに地理的空白地帯に対する知識情報の伝達をその『協会報告』に連載したが、新聞雑誌の普及により海外事情の紹介が多くなるに従い、当初の目的を失い、かつ外交官・軍人・旧地理家だけでは新たな方針を樹てることができず、明治三十年に廃刊にいたったことを述べた。⁽¹⁾

これを概括すれば、皇国地誌は経済的社会的発展とは無関係に中国の一統志的記述が主であり、それも長年月を要して完成に程遠いことが、国家の統計事業の発達とともに、当時の国家事業として欠格性をもったのであり、『東京地学協会報告』は海外事情の把握のためには、初期の単なる旅行者の講演にたよるだけでなく、自らの探検調査にう

つるべきであったが、多額の資金を擁しながら、専門的スタッフないし学問社会との接触を欠いたために、(多少の探検調査の補助はしたが)何らなすところなく多数の海外諸国の同種団体と交流をもちつつも、尻つばみになったのである。

(1) 拙稿、皇国地誌の編纂——その経緯と思想 一橋大学研究年報 社会学研究 8 (一九六七)

拙稿、『東京地学協会報告』(明治一二・三〇年)——明治前半の日本地理学史資料として 同上 10 (一九六九)

これに対して本稿にとりあげる『地学雑誌』ははじめから西欧科学の立場によって「地学」の導入、わが国における地学的調査と研究を志したことが、前二者と大きな差異である。しかしこのなかに幾多の日本独特の事情が内包されていることをみながら進めようと思う。

一、明治二十年代初期までの日本の地理学

まず『地学雑誌』の創刊される明治二十二年までの日本の地学⁽²⁾・地理学の状況を一瞥しておきたい。

(2) 明治の中期あるいは末期まで地理学は地質学のなかに包括されており、本稿においては地質、地形、火山、地震、鉱物、天文、気象、海洋等の地球に関する自然科学的諸現象の研究を「地学」という名でよんでおく。これは後述のごとく時代によって伸縮があるが、幕末維新以来の地理(人文地理も含めて)もまたこれに含まれることもあった。

西欧的地理学の導入

日本には古来からの風土記型の地理書(古くは和銅建長の古風土記から江戸時代の藩撰私撰の地誌、明治前半の皇国地誌まで)⁽³⁾はあり、外国についても世界諸国の地誌は中国に渡来した宣教師の漢訳書の訓点

つき復刻書あるいはその重訳和書、また蘭書よりの直接訳書などによって伝えられたが、明治初期のその集大成は大学南校官版の内田正雄編の「⁽⁵⁾輿地誌略」である。

(3) 拙稿、日本の地理学（地理、一〇—、一九六五）にそのアウトラインが書いてある。

(4) 大久保利謙・鮎沢信太郎、鎖国時代、日本人の海外知識——世界地理・西洋史に関する文献解題（開国百年記念文化事業会 一九五三）に江戸時代の邦人著訳の外国地理書二〇二部の解説がある。

(5) 内田正雄については海後宗臣の伝記解説（「明治文化全集」¹⁰ 教育篇、昭和三年版）があり、「輿地誌略」の編訳の原書については石山洋の解題（日本英学史研究会研究報告、七一号、一九六七、謄写印刷）がある。

輿地誌略の初編（一—三巻、総論およびアジア洲）は明治三年大学南校より（秋月種樹序文）、二編（四—六巻）は明治四年、二編下（七巻、ヨーロッパ洲終まで）は明治六年にともに文部省より官版として出版された。同年、内田は文部省出仕を退き、三篇（八—九巻、アフリカ）は八年十二月に版權免許を得ているが、九年二月に病没したので遺稿として修静館より出版。一〇巻（北アメリカ）も遺稿、一一巻上下（中南米）、一二巻（オセアニア）は西村茂樹の編纂で（出版人内田正義、修静館刊）十年二月版權免許、最終巻は十三年十月に出版されている。

一—七巻の官版（木版、和装本）は各県で翻刻され、銅版・活版の洋装本も明治十年代の前半にかけて各地の書肆より出された。ただし内田は生前（明七、七）初版本一—七巻を改正増補して「再校官版輿地誌略」（洋、小、五冊本）を出したが、各地の出版はほとんど初版本を復刻している。初版本の統計は「Statesmans' Yearbook」の一八六九年、再版本は一八七三年を利用してだけで、内容的に大きな変更はない。広島藤井維勉のときは「輿地誌略、乙ノ部、自八至十四」（洋、小、銅版、明一二）を執筆刊行して内田正雄の輿地誌略（甲ノ部）の続刊とした。

「輿地誌略」が各地で翻刻増刷されたのは、文部省蔵版で学校用教科書に指定されたこと、それは当時もっとも詳細に世界各国の事情を説いていたからであるが、その敘述は未開・半開の国がいかにして文明開化の国になるか、そ

のおのおのの政体・歴史・現状にいかなる差があるかをつねに簡明直截に説明していることが、当時の国家国民の志向に添ったからであらう。

(6) 中島滿洲夫(内田正雄著、輿地誌略の研究、地理、一三一—一九六八)はこれが当時の地理学の性格でもあったと述べている。

この地誌的地理書に対して西欧的な地球に関する知識はどのように導入されたか。もちろんマテオ・リッチ利瑪竇の坤輿万国全図(一六〇二—万曆三〇年、北京刊行、日本では京都大学図書館と宮城県立図書館に現存)にも地球の知識として「地与海本是円形、而合为一球、居天球之中、誠如鷄子黄在青内有」とあり、新井白石の西洋紀聞(一七一〇—宝永七年)に「大地、海水と相合て、其形円なる事、球のごとくして、天円の中に居る、たとえば鷄子の黄なる、青き内にあるごとし」と利用している。この程度の地球の知識は宇宙に関する星学・暦学の発達とともに、江戸時代後半には少なくとも読書人階級には一般化していたであらう。しかしより詳しい知識は、幕末の開成所から維新後の大学を通じて導入されたとみるべきであらう。

内田正雄の「輿地誌略」は世界各州各国の地誌書であるが、その巻之一の冒頭五十六丁は地誌総説で、次の文章によつてはじまっている。これは当時の最高学府の決定版である。

大凡地球上ノ事物ヲ通考スルニ、山川海陸ノ位置形勢ヨリ風雨寒暑、人獸草木ノ同異、及ヒ各国人民ノ種類、風俗、言語、政令等ニ至ルマテ、地方ニ從ヒ各同シカラズ、總テ之ヲ考窮スルノ学ヲ地学ト号シ、其書ヲ地誌ト名ク、然レドモ其事物浩瀚ニシテ、其端緒頗ル数多ナルカ故ニ、或ハ之ヲ大別シテ三種ト為スモノ有リ、

其一、地球ノ形状運動ヨリ度数等ノ都テ天文ニ関係スルモノヲ天文ノ部トシ、海陸山川ノ位置、風雨寒暑ノ自然ヲ論ジ都テ地勢地質ニ関スルモノヲ地理ノ部トシ、各国ノ境界、形勢及ヒ人民ノ風俗沿革等總テ人事ニ関スルモノヲ邦制ノ部ト称ス（訳字穩ナラズト雖モ姑ク之ヲ存ス、又、文・質・政ノ三字ヲ以テ之ニ充ル者有リ）、（下略）

ジラグラヒー（地学）とフイーシカル（地理）部とが混交しており、地誌という語も今日とちがうが、この地学の三分（天文部・地理部・邦制部）はその後、約三十年近くは公定のもとなつて使われ、地理部は地文学、邦制部はカッコ内のように政治地理とよばれた。その内容は注記するごとくであるが、とくにこの邦制部はその冒頭に「此部ハ都テ人民邦国ニ関渉スルガ故ニ其端緒頗ル多端ナリ、今ソノ緊要ナルモノヲ挙ルハ曰人種ノ區別、曰言語文字ノ種類、曰教法ノ統派、曰風俗及ヒ開化ノ等級、曰各国ノ形勢及ヒ政体ノ可否、曰古今歴史ノ沿革等ナリ、其他尚、學術、製造、疾病、教育、政表等ノ如キハ數ルニ暇有ラズ、其詳ナルハ各専門ノ学科ニ就テ之ヲ講明スルヲ要スベシ」と述べている。第一部、第二部も天体としての地球及び地球表面に関する一般的記述であるのは、「輿地誌略」が研究書でなく教科書であるから止むを得ないとしても、この第三部邦制部にいたっては全くの寄せ集めの記述であり、課題的な意識をこのなかから酌みとることは困難である。これは明治初期だからであるのか、それとも地理学は元來このような諸専門分科の資料を本質的に必要とするばかりでなく、ついにそれを脱却して独自の分野をもつことができぬものなのであるか。

（7）各部の内容をみると次のようである。

天文部——地球ノ形状及自転ノ説、経度緯度及時刻ノ差、地球五帯ノ区分（地球黄道ノ運行及四季変化）

『地学雑誌』——创刊（明治二十二年）より関東大震災まで

地理部——世界ノ大別及ヒ五大洲ノ幅員、地球表面ノ形状及ヒ區別、海水ノ運動及ヒ大氣風雨寒暑等ノ略説
 邦制部——世界人口ノ大略及ヒ人種ノ區別、言語文字、教法、衣食ノ需用及ヒ開化ノ等級、政治及國体ノ區別、人類ノ始及ヒ
 世界歴史ノ大意

この地理学の三区分の考え方は文部省刊行の「地理初歩」⁽⁸⁾（師範学校編纂、明治七年）にも示されている。

此地球表面ノ事ヲ知り得ル学ヲ「ゼオガラヒー」ト云フ、「ゼオガラヒー」トハ即地理学ト云フ義ニシテ、地球表面ノ事ヲ
 説キ明スナリ、

地理学ニ三種アリ、「ナチュール」⁽⁸⁾「ポリチカル」⁽⁸⁾「マテマチカル」ト云フ、「ナチュールゼオガラヒー」ハ地形、山川、
 海島ナドノ自然ニ由ルモノヲ説キ明ス学ナリ、「ポリチカルゼオガラヒー」ハ都府郡県城市ナドノ政治ヨリ出ルモノヲ説キ明
 ス学ナリ、「マテマチカルゼオガラヒー」ハ地球ノ運動、方角、里数ナドノ数学ニ関スルモノヲ説キ明ス学ナリ、

(8) 「地理初歩」は明治六年三月刊のものが最初だというのが（未見）、数年間、各県で出版されたらしく、所蔵のものは明治七
 年五月の愛知県翻刻本（木版十三丁、明六の初版本と同じか）と明治七年十月改正の文部省刊行本（木版十二丁）であり、前
 の引用は後者のものであり、前者の字句に処々訂正を加えてある。この小著は小学校用の極めて簡単な地球上の水陸の分布、
 方角、経緯度、山河・海峡・島・岬・湾などの名称を説明したもので、当時の多くの地理書が各国の地誌を主としたのに対し、
 地誌でない地理書として特徴がある。同じような体裁のものに明治十一年一月の山梨師範学校蔵版「地学初歩」（田口小作・
 金子家英編輯、和紙活版十一丁）がある。これには地理学の三区分はなくなり、前半は「地理初歩」とやや似ているが、後半
 には各大陸と日本の記述がある。

西歐風の地学教育

小学校、師範学校の教育はしばらく措くとして、大学における地理学関係のあり方をたどると、
 東京大学予備門（明八開校、四か年課程）の第一年に地理学および日本地誌要略があり、第三年に地理学と自然地理が

あった(明二六)。その後予備門が三か年課程になると(明一四・七)地理学は消滅するが、医学部分費には第二年に地理学という科目で地文学があった(明一七・四)。本費分費の合併した後も、第一年に地文学二時間があり、隈本有尚が担当していた(明一七・九—一八・七)。ここでの地文学は今の自然地理の一部分であり、もっぱら地理学の名で地球あるいは自然の状況が講義されていたらしい。ともに内容については不詳であるが、これらは予備門あるいは医学部という性質上、専門的教育とは考えられない。

西欧的地学の専門教育はまず開成学校(幕府の洋書取調所の後身、後の東京大学)に入った。明四に同校独逸学部(鉱山学科) Karl Schenk がおり和田維四郎を教え、明八には H. S. Munroe は地質学・金石学(今の鉱物学)、Edmund Nauman は金石学・地質学・鉱山学、工部大学校には J. Milne が金石学・地質学・鉱山学を担当した。しかし、じっさいに後年活動する研究者の養成が行われたのは東京開成学校(法理文三学部)と東京医学校が合さって明一〇、東京大学となつてからである。

東京大学には文学部に史・哲・政治・和漢文学の四科があり、おそらく史学科のなかに中国風に地理に関する講義があったと思われる(明一四には史学科が消えて三科となる)。理学部には地質学及び採鉱学科があり(明一三、地質学科と採鉱冶金学科に分離)、雇外国人教師ナウマンが助教和田維四郎⁽⁹⁾をしたがえて、ただ一人の専攻学生小藤文次郎⁽¹¹⁾を教えた。これが日本における西欧的地学教育の始であった。ナウマンは自然科学としての地球の生成を教授するとともに、日本の地質構造の研究に着手し研究者を養成した。当時の自然科学的方面の外国人教師は、つねに西欧における一般理論の導入・教育をするとともに、単にそれに止まらず自らも日本をフィールドとして具体的実証的研

究を行い、その成果を発表し学生をも教育した。これは地質・探鉱という当時の日本に緊急な国益的必要性もあったからであるが、動物・植物にしても同じであり、自然科学界あるいは博物学界の研究方針が人文・社会科学界のもっぱら講壇的教説であつたのと差を示している。

その後、大学ではナウマンは内務省地質測量長にうつり工部省にいた C. Netto が理学部にうつって探鉱冶金学を講じ、ナウマンのあとは David Brauns (明一より三年間)、K. C. Gotsche (明一五より三年間) で雇外国人教師は終り、第一回 (明一二) の卒業生小藤文次郎は明一八にドイツより帰国して教授となり、内務省地質局の原田豊吉⁽¹²⁾ (明一六帰国)・和田維四郎が兼任で教え、巨智部忠承 (明一三)、横山又次郎、中島謙造、富士谷孝雄 (明一四)、菊池安、鈴木敏 (明一六)、三浦宗次郎 (明一七) らの卒業生が出て、農商務省地質局 (後の地質調査所) あるいは東京大学に就職して日本の地質学の調査と研究を進め、その成果は東京大学の「理科会粹」・「帝国大学理科紀要」や勸農局地質課・農商務省地質局・同地質調査所等の調査報文や地質図幅説明書等に発表された。

- (6) Edmund Nauman (1850-1927). 明八・八来日、一時文部省金石取調所に身をおき翌年、開成学校の地質鉱物学の教師となり、明一〇、東京大学設立とともに最初の地質学教師となった。明一一・五大学を辞し内務省地理局に地質測量長として赴任、日本の地質調査所の設立と事業の進展に力を尽した。明一八帰国。(日本科学技術大系、14 地球宇宙科学、九四ページ以下)。Ueber den Bau und die Entstehung der Japanischen Inseln (1885), Ueber die Geologie Japans (1885) が主著で、いずれも帰国の年の印行である。日本の地質地体構造、山系島弧を説明したもので、後述の原田豊吉とともにこの方面における日本地質学の開祖である。地学雑誌には「四国山地の地質」(山上万次郎訳、四集四〇—四八、明二五)がある。
- (10) 和田維四郎²⁾ (1856-1920) 若狭小浜藩貢進生。開成学校独逸学部 (鉱山学科) 教師 Karl Schenk の下に学び、「金石学」

(訳) (明九)、金石識別表 (明一〇)、本邦金石略誌 (明一一) 等を著わし、東京大学ではナウマンの助教となり、ナウマンの建議で地理局に地質課ができるとその次長となり、明一八、農商務少書記官より地質局長心得、明一九地質局長となり、明二三、鉱山局長兼地質調査所長となり、兼ねて東京大学理科大学教授となつて、地質学科で教えた。明二六退官。明三〇—三五、第二代の製鉄所長官、以後、中国の鉱山調査を行い、また鉱物研究に従い「日本鉱物誌」(明三九)、「支那重要煤田図」(大三)を著わした。地学会と地学協会と合併以後、終身、地学協会の評議員であり、幹事(明二五—三三)、副会長(大六—九)であつた。後述、協会の中国地学調査の項参照。その鉱物コレクションは今、三菱鉱業株式会社の博物館にある。

(11) 小藤文次郎 (1856—1935) 津和野藩貢進生。明一二最初の東京大学地質学科の卒業生。明一三—一七文部省よりライプツヒ・ミュンヘンに留学後、理学部講師、明一九帝国大学創立とともに理科大学教授となり、爾来、横山又次郎(後記)とともに退官まで日本地質学界を率いた。

(12) 原田豊吉 (1860—98)、一五歳のとき陸軍少将の父に従つてドイツに行き、ミュンヘンで岩石学・古生物学を学び、ドクトルとなつて明一六帰国、明一八農商務省地質局次長となり、全国地質調査の指導監督にあたり兼ねて理科大学教授。肺患のため明二四・四—二五・六歐洲で療養、しかし一年半後死亡。

Versuch einer geotektonischen Gliederung der japanischen Inseln (1888). 日本地質構造論(地質局地質要報、明二一及び地学雜誌、明二二) Die japanische Inseln, eine topographisch-geologische Uebersicht (1890) (地学雜誌上に学生によつて翻譯)、九州の対曲(地学雜誌、明二二)などの論著を遺し、日本地質学の黎明期をかざつた。

明一九に帝国大学となつて分科大学制がとられると、文科大学に史学地理学という講義が二つあり、一年に地文学(一時間)、史学及び地理学(八時間)、二年に史学及び地理学(九時間)、三年に同(一〇時間)の授業があり、理科大学には地質学古生物学の二講義、鉱物学一講義があつた。これは明二六・八、講座制になつたとき、文科大学は哲史文学科一二講座となり、そのなかに史学地理学の二講座があつた。すなわち国史科に国史及地理(一年六時間、

二年六時間）、史学科に地文学（一年一時間）、史学及地理学（一年七時間、二年八時間、三年八時間）があつて、リスの退任の後、坪井九馬三が教授であつた（第二講座は長く欠員）。この担当者とその課目内容からみて、史学に付随した地理であつたと想像してもよいであろう。また法科大学では第三年を行政学・財政学・外交学の三部に分け、外交学の部に地理学（特に商業地理学）の授業があつた。いずれも編成表の上で知り得るだけで、どのような授業をしたかはわからない。

これに対して理科大学地質学科には地質学（小藤文次郎）、鉱物学（和田維四郎）、古生物学（原田豊吉）の三講座があつた。これらについては幸、『地学雑誌』その他の資料があるので、本稿においてその内容を追跡してみたい。

地学関係の諸機関と国際会議 他方、大学と地質局（地質調査所）以外では、当時の広義の地学関係では、内務省地理局で気象観測・地震観測がはじまり、やがて東京気象台（明八）となり各地に測候所が設けられ中央気象台（明二）ができた。海軍では兵部省海軍局に水路部（明四）ができ沿岸測量・海洋調査を行い、陸軍では参謀本部で全国測図を行い、内務省の測図事業を引き継ぎ陸地測量部（明二）が設けられた。また東京大学理学部、工部大学の関係者（会員一一七人、うち外国人八〇人）をあつめて日本地震学会（明一三）が設立され、世界最初の地震の学会となりその報告類は世界唯一のものとして重んぜられ、明二四、濃尾地震によって震災予防調査会ができるまで続いた。

狭義の地学——地質学では北海道の炭田調査（明六—八）に力を尽した B. S. Lyman (1835—1920) の下に坂市太郎・賀田貞一らが養成され、大学出の官僚派に対して民間派の地質学者となつた。また明一二に東京地学協会が創立

されたが、この関心は以上の諸機関とはちがひ、地球科学的なことよりも、世界の政治・経済・生活の方にあつたことは前稿において述べた通りである。

明治初期の日本の西欧的地学・地理学の導入、研究者の養成はかくのごとく、ようやく緒についたばかりであつたので、明八（一八七五）年、第二回万国地理学会議がパリにおいて開かれるとき、在仏の鯨島公使から「各国有名ノ地理学家モ来会候ニ付、旁本邦ヨリモ同学致シ居候人物」を差出すかと聞いてきたのに對し、内務省は「本邦ニ於テハ右専門修学ノ者未タ有之間敷ト被存」と答え、太政官も地誌繪図類のみを送れと指令し、前年暮に出たばかりの『日本地誌提要』（二―三卷）を送っている。（日本科学技術大系、11、自然、七八ページ引用）。当時、内務省地理寮において皇国地誌編纂の事業が進行中であつたが、この人々をもつて内務省自身「右専門修学ノ者」とみなかつたのは、東洋的な地誌編纂の地理家と西洋的な地理学者とを區別していたものであろうか。

第三回會議はベニスで明一四（一八八一）年に開かれ、日本政府はベニス駐在の無給領事（貿易事務官）イタリア人ウエルセーを準備委員とし（東京地学協會は前年秋、創立二年目、連絡を受け同人を特別會員に推薦している）、會議には折よく東京地学協會創立の主唱者の一人、鍋島直大が全權公使としてイタリアにいたので出席した。第四回會議（パリ、明二二―一八八九年）には在歐中の氣象学者和田雄次が出席して發言している。この會議については地学雜誌（一―五）に簡単な予告記事があり、東京地学協會報告（二―一六）には在仏本野一郎公使より會議の景況の通信の写がのっている程度で、まだ日本に関心をもつような地理学者のなかつたことを示している。

他方、万国地質学会議は地理学会議より七年おくれて、明一一（一八七八）年に第一回をパリで開いたが、日本人

の出席は第三回（ベルリン、明一八一八八五年）に在欧中の和田維四郎が最初であった。第七回（セントペーテルスブルク、明三〇一八九八年）に巨智部忠承（地質調査所長）、恒藤規隆（同技師）が会議出席のために派遣され、（地学雑誌、九集、明三〇・十一月、露国通信）、ついで第八回（パリ、明三三一九〇〇年）には巨智部忠承・鈴木敏（地質調査所技師）・小川琢治（同技師、博覧会列品審査員）・山崎直方（在欧留学中）らが出席、以後、毎回正式の代表が地質調査所（後に大学）から送られるように成長した。これに対して万国地理学会議に日本から地理学者としての出席者が出るようになるのは、ずっとおくれ、第七回（ベルリン、明三二一八九九年）に在欧留学中の山崎直方が出席したのが最初であった。このとき東京地学協会は通信会員にしたので、大会の景況を地学雑誌一二集、明三三・二―三月号に寄せ、また長文の文部大臣への報告書を地学雑誌一二・一三集の一〇回分に転載してある。

帝国大学や東京地学協会があっても、地質学についてはともあれ地理学についてはまったく不熱心だったことは、次の第八回万国地理学会議（一九〇四―明三七・九、ワシントン・ニューヨーク）における日本の代表日置益（1861-1926、外交官、後に二十一箇条問題のときの駐支公使）の報告書翰に示される（地学雑誌、一七―二、明三八）。

……英仏独等の諸国が特に多数の代表者を派出し中には真に知名の専門家も少からざるに、本邦よりは筋違の小生が単独なる代表者として出席することは窃に心細く思ひ居る際、開会に近く突然奈佐忠行氏（高商教授）文部省の命に依り来着せられたるを以て大に力を得たる心地致候。……小生は素より無学者の事にて学会に向ては何等の効なく、奈佐其人も亦突然の命に赴きたる為め論文寄送の準備もなく、小川（琢治）氏の起草に係る「日本に於ける地理学の発達」と題する有益の論文も到着後れたるため翻訳遂に間に合はざりしのみならず、……開会間際に至り提出するも到底審査員の手を通すこと六ヶしかりし勢に

て、遂に一篇の論文を万国会議の席上に披露するを得ざりしは頗る遺憾に存候」

という状況であったが、「戦勝の余栄」により会議社交上は優遇されたようである。毎回正式の日本代表を出席せしめるようになるのは第一次大戦後である。国力の関係もあり、また海外渡航が今ほど簡単ではなかった時代とはいえ、地質学と地理学との成長の差、また学問としての地理学の地位を示すものであろう。

万国地理学会議の今昔

地理学の対象の多様性は万国地理学会議の分類にもあらわれている。第四回パリ会議（一八八九年）に出席した和田雄治が示すところは上段のごとく（氣象集誌、第九年、明二三、日本科学技術大系、自然篇、八〇ページ引用）、それを地学者は下段のごとく訳している（地学雑誌一一五、雜報）

第一 数理部（測地、水路、地形、地図）

測地水路部

第二 物理部（氣象及び氣候、地質、生物地理）

地文学部

第三 經濟部（通商及び統計地理）

商業地理部

第四 歴史部（地誌、地理地図学）

歴史地理部

第五 教育部（地理学の授業法及び専攻法）

地理教育部

第六 遠征部

旅行探究部

第七 人種部

人種学部

これを最近開かれた第二〇回ロンドン会議（一九六四年）の各部（人口・集落地理学、経済地理学、氣候学、水理学・海洋学・氷河学、生物地理学、地形学、歴史地理学、応用地理学、地誌、地図学）や第二一回ニューデリー会議（一九六八年）の各部（地形学・氣候学・水理学・氷河学・海洋学、生物地理学、総合自然地理学、経済地理学、人口地理学と集落地理学、歴史

地理学と政治地理学、地誌学と地方計画、地図学と写真地理学、医学地理学」と比較してみると、さすが旅行探検や人種の部はなくなったが、地理教育はなお研究委員会として存置している。反面、明治時代にはなかった集落地理学、応用地理学があらわれ、また内容的には昔の商業地理と今の経済地理学は大いに異なるなど、幾多の変化があり、数量的地理学 quantitative geographyといわれるものなどもロンドン会議で一派をなして経済地理部会と共同で一日を費やすなど、まことに多彩である。全体として地理学とはいかなるデシプリンに基づく学問分野であるか、これら多様な対象を包含するデシプリンが存在するのであるか、これは更に究明を要することである。

とまれ、明治二十年代初期までの日本の地学・地理学の状況はかくのごときものであった。一口にいえば西欧科学の研究成果の導入と日本に対する適用調査がせい一ぱいであって、そのなかでも自然科学的方面の純地学が一步進んでおり、人文社会の研究をふくむ人文地理学にいたってはその方法、考え方において前代とあまり大差がなかったといつてよかった。

二、地学会の『地学雑誌』

創刊の事情 地学会が『地学雑誌』を刊行するにいたった経緯は、その創刊号の巻末「地学会記事」に出ている。

明治廿一年十一月三十日午後三時ヨリ農商務省地質局ニ於テ例会ヲ開ク

議事 小藤文次郎氏動議ヲ為シテ曰ク、本会設立爾来十一閏年、開筵ノ時ハ必ラス演説討論アリ、开ハ地学会誌ニ記シ伝フレハ、同会誌ハ非売品ニテ会員限り頒分シ来リ、僅ニ謄写ニ換フル位ノ会誌ナレバ、世人其利益ヲ受クルモノ尠キ而巴ナラス、

剰エ本会ノ存立ヲ知ルモノ稀ナルハ遺憾ニテ、本会演説討論并ニ常日研究セル結果等ヲ記スル冊子ヲ刊行シ広く販売セハ、世ヲ裨益スル事些少ナラザルベシト述ベリ、出席全員賛成ニテ此舉ヲ可決ス

議事了ツテ演説アリ、其要領ヲ左ニ掲ク

花崗岩の逆出に因て粘板岩中に生じたる「桜石」の説 理学士 菊池 安（下略）

また同号末尾の「社告」にも

本雜誌ハ地学会ノ演説討論等ヲ登載スルハ本会ノ機關タル此雜誌ナルハ勿論ノ事ナレトモ、世上一般、地理、地質、鉱物諸学科篤志者ノ学苑会堂タラン事望シケレハ、続々前記学科ニ関スル事ヲ報道アリタキ事願シケレ、其節ハ本雜誌編輯所東京神田区裏神保町一番地、若クハ……氏宛郵送アラン事ヲ冀望ニ堪エザルナリ謹白」（*発行所敬業社の所在地）

なぜこの年に非売の「地学会誌」から公刊の「地学雑誌」に移ったかは明らかでないが、地質学科の卒業生が明治十二年以来、ふえてきて雑誌公刊の実力が蓄積してきたことのほかに、前年、明二一・七・一五に磐梯山の大破裂があつて、地質学者たちの活動が盛んになったことも一因であるかもしれない。ちょうど後年、関東大地震が京都の『地球』、東京の『地理学評論』を発足せしめたように。ただし新雑誌に磐梯噴火や関東大地震の論文が続々と発表されたわけではなかった。

こうして地学雑誌は発行され、第一集第一巻は「明治廿二年一月廿五日発兌」と表紙に示し、その裏面には「本誌儀明治廿一年十一月十日出版条例ニ依り出版スル事ヲ許可セラレ第一号ヨリ第六号ニ至ル即チ六冊分ノ版權登録証ヲ下附セラレタリ」とある。

(13) 当時このように半年六冊分づつ版權登録証を出していたらしく第五集(明二六)までつづき、第六集(明二七)には一年十二冊分についてこの記述があり、後にそれに代って表紙に「明治二十一年十二月十日内務省許可」と書かれるようになり、これはその後五十年以上、第二次大戦で休刊になるまで続いた。

地学雑誌の発刊は地学会の機関誌たることであり、すなわち東京大学地質学科の教職員、卒業生、学生の研究発表の雑誌であることであつたが、同時に日本に「地学」知識の普及啓蒙をも図るものであることは、前記「社告」にもみる通りであり、とくに最初の四—六年までその傾向の強いことが、雑誌の内容にみられる。本稿において主としてふれようとするのは、このいわゆる「地学」のなかにおける地理学に関する諸項であるが、これは当時、「地学」が地質学を中心として地理学・鉱物学、その他地震学・気象学・海洋学等の地球科学 Earth Science 全般をふくんでおり、学問的に未分離の状況にあつた⁽¹⁴⁾ほか、編輯掛⁽¹⁵⁾を引受けた小藤文次郎が新しい地理学——太政官・内務省地理局の「皇国地誌」編輯者たちや東京地学協会の行き方とちがった理科的西欧風の地理学——に特別の興味をもっていたから、地学雑誌は少なくとも初期において、また大正中ごろまではかに地理学の雑誌がなかつたので、日本の地理学史に重要な意味をもつのである。

(14) 地震学は前述のごとく日本地震学会があり、地学者らとは別の途を歩んでいたが、地震は長く地学雑誌のテーマの一つであつた。気象学もその観測などは地学者の調査対象ではなくなっていたが、気象・氣候が地表の一自然条件であるので、やはり地学雑誌のテーマであつた。海洋学も同じ理由でテーマとなり水路部の軍人がしばしば寄稿した。

(15) 明二・二・二二の地学会月次会で役員を改選し、幹事和田維四郎、書記中島謙造・菊池安、編輯掛小藤文次郎とある。

地学雑誌は明治二十二年創刊以来、今日にいたるまで継続刊行されており、八十年をこえた。今、叙述の便宜上、雑誌をもとにして時代を区分すれば次のごとくになる。

第一期（明二二―二五） 地学会により地学雑誌が創刊されてから、地学会・東京地学協会の合同決定まで。この時期は地質学関係者（大学と地質調査所）からなる活発な団体で、全国に地学同好者の雑誌購読者をもっていた。

第二期（明二六・一―三〇・六） 地学雑誌を地学協会より刊行するようになってから、明一二以来の協会報告を廃刊するまでで、地学会と地学協会との合同を非として別に東京地質学会が創立され地質学雑誌を刊行するようになり、大学に本拠をおいて研究誌として成長する。協会にうつった地学雑誌は地学会時代の同人誌的色彩がややへった。

第三期（明三〇・七―四一・五） 「協会報告」が廃刊になって、地学雑誌が協会の唯一の定期刊行物となる。毎月の講演を載録する「協会報告」タイプと、地質調査所の技師たちの執筆する地学タイプとの複合が、第三期と次の第四期の性格であるが、第三期は小川琢治が編集・運営に力をそそぎ、地学より地理学に転換しようと志した時期である。日清役後から日露役をはさんで、大陸に関心の深いのが特徴である。

第四期（明四一・五―大一二・九） 小川琢治が京都大学に移ってから、井上禮之助が實質上、主宰する時代で、大陸への関心はますます強く、協会は地質調査所の援助の下に「支那地学調査」を行い（明四三―大四）報告書と地質図を刊行した（大六―一二）。しかし関東大震災で会館・蔵書資料の全部を焼失し、地質調査所内に事務所を移し、その付属機関のごとき観を呈するにいたる。

第一期の地学雑誌の内容

小藤の地理学観については章を改めて後述するが、まず地学雑誌の第一期である地学会発行の第一―四集（明二二―二五）の内容を概観してみよう。毎号の構成は論説三―五、雑録二―三、雑報（無署名多し）三―八、講義（数回統稿）、批評一―二、質疑応問三―七、地学会記事、会員消息、寄贈書目録（主として各種学会よりの雑誌）等である。

論説は今日でもその筆者のオリジナルの古典的論文として見られるものもないではないが、かなり啓蒙的教科書的なものも多く、また調査旅行記ないし所見報文のものもある。試みに第一集の論説表題と著者名をあげてみると

（第一年を第一集（輯）、毎月号を第何巻といい、通巻今日にいたる）

（第一巻） 地学雑誌発行ニ付、地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス

磐梯近傍の湖水

東京四隣滄桑之変

日本島の温度及雨量

開拓ト殖林ハ雨量ヲ増減セシムルヤ否ヤ

（第二巻） 北海道地質略説

日本地質構造論（五巻まで続く）

宝石鑑別法

大蕨山の地質

（第三巻） 東京近隣ノ地質ト水脈

小藤文次郎（理科大学）

菊池 安（理科大学）

鈴木 敏（地質調査所）

水山 学士（神保か）

硯山 博士（小藤の筆名）

神保 小虎（北海道庁）

原田 豊吉（地質局次長・理科大学）

和田 維四郎（地質局長・理科大学）

巨智 部忠承（地質局）

鈴木 敏（#）

佐渡相川ノ鉾脈（九卷まで）

明五石見の震災（四卷まで）

（第四卷）九州の一大噴火山

日本古今測地一班（九卷まで）

日本北西海岸の深雪

（第五卷）陸奥国上北郡小川原沼築港適否

蔵目喜鉾山地質予察報文

信州鹿塩塩泉ノ実用適否

四国礦泉産地

（第六卷）東京地学協会報告を讀で感あり⁽¹⁶⁾

阿波地理小誌（一〇卷まで）

（第七卷）大蕨山玄武岩の土性試験成績 ▲

大蕨山玄武岩に就ての注意 ▲

（第八卷）九州の対曲

（第九卷）熊本地震概察報告

熊本地震調査報告 ▲

（第一〇卷）地震考説

東京建築石材の改良を望む

『地学雑誌』——創刊（明治二十二年）より関東大震災まで

中島謙造（"）

巨智部忠承（"）

鈴木敏（"）

大川通久（"）

矢津昌永（福井県尋常中学校教諭）

肝付兼行（水路部長海軍大佐）

巨智部忠承（地質局）

鈴木敏（"）

奈佐忠行（"）

原田豊吉（"）

小藤文次郎（理科大学）

東条平二郎（地質局）

巨智部忠承（地質局）

原田豊吉（地質局長）

小藤文次郎（理科大学）

金田樞太郎（地質学科学学生）

小藤文次郎（理科大学）

巨智部忠承（地質局）

(第一卷) 十和田湖の地質記事

日本の海岸線、海部及海流(一二巻まで)

(第二卷) 本邦汀線の変遷

塩原地相一班

化石談

白山之記

原田豊吉(地質局次長)
海軍水路部(I. J. Reinの調査の英訳から)
原田豊吉(地質局次長)
菊池 安(理科大学)
横山又次郎()
矢津昌永(第五高等学校教員)

(16) これは河井庫太郎の日本噴火調の論説についての誤の指摘であるが、五か月後の一一巻に特別欄として河井の「ドクトル原田氏ニ答フ」と黙々笑人の「注解」が載せられ、皇国地誌編集の地理家の思想・方法に止めを刺したものである(前稿参照)。

このほか論説の前、巻頭に銅版図版とともに次の伝記がある。

(第四卷) 地学大家ブッフ Leopold von Buch 先生略伝 猿斎仙史

(第五卷) 地学大家ライエル先生略伝 硯山鋤夫

(第六卷) 地学大家ウエルネル先生略伝 靖南居士

おのおの十八世紀末から十九世紀前半の地質学者である。筆者の硯山鋤夫は小藤文次郎であるが、靖南居士は後にもしばしば出るが確定できない。しかしおそらく猿斎仙史とともに小藤でないかと思われる。この地学者伝をまねて三―二九・三〇(明二四、五一六月)に金田檣太郎(大学院学生)が雑誌で「十九世紀地学大家伝」として八人、四―四七(明二五、一一月)五一四九・五四(明二六、一一六月)に西和田久学(大学生)が十余人の地質学者の小伝をのせて

いる。

最初の第一年は大体こんな調子である。すなわち執筆者の大部分が理科大学地質学科の卒業生（うち学生一）で、例外は農商務省地質局（翌年地質調査所となる）に勤め理科大学地質学科教授を兼ねている和田維四郎と原田豊吉の二人と地質局に勤務する地質学科出身でない東条平二郎、大川通久の二人、水路部の肝付兼行大佐、異色は矢津昌永である。彼は第一回尋常中学、尋常師範学校の教員試験に合格し福井県に奉職し、同年小藤文次郎の校閲によって『日本地文学』を刊行したので、編輯掛たる小藤が面識があり投稿を採用したか、あるいは投稿をすすめたのである。そして三月の地学会で他の二五名とともに学会の准員に推された。

(17) 『日本地文学』は同じ号（第四巻）で校閲者たる小藤自身が批評欄でとりあげ賞讃しているが、後年、明二九におそらく小藤の推挙によってか、シカゴ万国博で名誉賞状を得た。第六巻で頓野広太郎（山口高等中学校教諭）は學術用語の翻譯等について批評し、『国民之友』（四七号、高橋五郎）の批評に対してとともに、矢津は七巻で答えている。また地学雑誌二—一四（明二三・二）で石井万次郎（第一高等中学生徒、石井八万次郎の誤植かそれとも山上万次郎か）が字句の不当をあげて批評している。

地学雑誌は創刊の翌月、農商務省地質局から次の通達を受けて、巻頭に掲げている。

丁第七号 地学会 地質土性等ニ関スル本局ノ録事ハ自今、其会ニ於テ発行スル地学雑誌ニ地質局録事ノ一欄ヲ設ケテ掲載スルノ義ヲ囑託ス 明治廿二年二月十六日

このような「地質局ヨリノ恩命ヲ蒙リ……至宝、至貴ノ學術的結果ヲ得」ることになって右掲の第一集論説の中、▲印の三つはその「地質局録事」である。地学会は少なくとも初期は資金がなく、このような地質局の録事記載の囑

託が雑誌発行に力強い援助になったことと思われる。創刊号は一部十二銭であったが、次号から十銭に値下げしたことも、これと関係があるかもしれない。しかしこの「地質局録事」は「地質調査所録事」となって、第三集(明二四)にも巨智部忠承、清水鉄吉、奈佐忠行らの四篇があるだけだが、この地質局・地質調査所に依存する態勢は、ひいて論説を同所の出版物からの転載をもたらし精神となり、第一集だけについても原田の日本地質構造論は「地質要報」よりの転載であり、その他かなり官庁報文らしいものもみえるが、後年、これがはげしくなり地学雑誌および東京地学協会の陥し穴となる。

つぎにこの期の特色の一つは「講義」と称する連載がいくつかあることで、当時の地学雑誌の啓蒙的色彩をよく示している。

普通地理学講義	小藤文次郎	一の一五、七一八、一一、二の一三
地質学講義	鈴木敏	一の六一〇、二の一七二〇
応用地質講義	鈴木敏	三の三六(未完)

「雑報」は地学に関する断片的記事であって、日本海の潮流、末無し川、常陸産金の地、世界最寒の地、陸の高さと海の深さ、九十日間世界一周、地震と動物の関係等々の一般事情や、磐梯の飛灰と泥土は酸性なり、阿蘇山の震動、金沢臥竜山の異変、名古屋気象の一斑、大坂築港会社等々のカレントな情報を序列もなく多数に掲げたもの、「雑録」は佐渡の鉱脉(中島謙造)、天草産の天然骸炭(鈴木敏)、北海道化石産地(神保小虎)、颶風要言(伴鴻海客)、某新聞記者の水害・山林相関説を読む(細川兼太郎・大学生)、東京名勝真土山の事蹟(関東野人)、信州見聞録(長野県

物産陳列所長、一等測候所長心得、河野常吉)、登別温泉及び間歇泉(北海道庁地質調査員、石川貞治)、徳島堆土研究の材料(徳島船場町、鳥居竜蔵)等のごとき中央および地方の研究者の小研究または抄訳をのせる。「元来、本誌は所謂地学者の会堂なれば、可及的全国津々浦々に至るまで地学に関することは、精粗巧拙に拘らず続々寄稿せられんことこそ望ましかれ」(読者の注文)一の(一雑報)という地学会の方針でもあったのであろう。

これらの雑録・雑報が講義とともに読者に有用であったことは、一の三(明二・三)より毎号のせられている質問応答をみるとわかる。第一回の質問は遠江国豊田郡の小学校訓導からで「一、内海沿岸ノ十州製塩ニ適否、地勢上ノ関係、二、地震ノ原因、三、地球創成ヨリ今日ニ至ル変遷」というもので、梓弓云々の和歌一首を添えてあるのも明治期らしい。次号以下にはジェーキー氏地文学問答として愛知県某が同図版中の気圧配置図について数問を出し、あるいは遠日点近日点について、潮汐について、教科書中の本邦山脈説について等々、極めて初歩的なものであつて第一集だけで五四問に及んでおり応問者は小藤、神保あるいは地質局員、理科大学学生などである。この質問があまりにも教科書的のものが多かったせいか、前記「読者の注文」は「本誌を自するに世間流行の通信教授を以てせられざらんことを」と結んでいる。

この応問欄は第九集(明三〇)まで続き五六七問に及んでいるが、解答を与えたのは四分の一ぐらいであろうか。最後まで「我國の何月何日何時は米國紐育府の何日何時にあたるか算法の説明を乞う」とか、「南の方向に島嶼の多き理は如何」「富山房礦物学新書の正長石の条に双晶の方法に三様ありとあり、其三様を承り度候」という風なもので、いかに全国に地学の独習者が多いかを想像できる。

「批評」もまた一つの独立した欄である。物理学術語字書、鉱物学初歩（ラットリー）、日本地文学（矢津、二回）、日本植物図篇（牧野）、学海探究の指針（水路部）、帝国大学理科紀要（数回）、地理学講義（志賀）、動物学教科書（飯島魁）、熊本明治震災日記（翁巷迂叟）等が第一集でとりあげられているが、大部分は小藤文次郎執筆にかかると新刊紹介か、または門弟の先生著書の賞讃の辞である。例外は前述、矢津日本地文学に対する批評と答弁である。

論争としては前述、原田豊吉と河井庫太郎の火山噴火調のほか、小藤文次郎と原田豊吉の地質年代の和訳についての一件がある。いかにも学問輸入の草創時代らしく、かつ明治風なので書きとめておこう。

事の発端は極めて簡単で、第一集十二月号の最終ページの半段に余白のできたためか、「左に掲ぐる所は地質学上、普通に用ふる術語にして本誌上にも風々頭はれ、且つ質問を起す者多きを以て聊か茲に摘録して看者の参考に供せんとす」として、無署名で「地史系統の通観」と題し、原始大統 Archaean Group（片麻剝岩系 Gneiss System, 雲母剝岩系 Micachist Group, 千枚剝岩系 Phyllite System）太古大統 Paleozoic Group（……）中古大統 Mesozoic Group（……）近古大統 Cainozoic Group（……）と系統と訳語をつけたものが載せられた。

これに対して翌月号（二の二三）雑録に原田豊吉は「地学上の術語に關して」の一文を寄せた。術語の解釈には精密に原語の定義を示すべきであるとして、Andesite を安山岩というが富士岩というかは、原語の Andes に基くことから前者が正しいように、Archaean は生物存否の疑問にふれない名称をえらび、ギリシヤ語の archaios 太古にしたがい原始大統でなく太古大統とよぶべく、以下は確固たる生物化石をふくむ故に生の字を記し Paleozoic (palaios 古 zoe 生) は太古でなく古生で、Mesozoic (mesos 中 zoe 生) は中古でなく中生じ、Kainozoic (kainos 新 zoe 生) は新生で近古でない論じた。そして文中、「我を張らずして」「本誌の編者に告ぐ、足下苟も過つて改むるに憚ることなくんば須く直に其非を捨て其見を取るべ

し」と圈点をつけてしるし、そうでなければ「編者の自作に係る所の名辞を詰めんが爲め施行せし、頗る鉄面皮なる処置と云はざるを得ず」とこれも後半圈点をつけてある。

当時、地質学の双頭の一人、農商務省地質局次長兼理科大学教授、ドクトルの文としてはどうも穏やかではないようだが、すぐその次に「術語に関する名論を拝聴す」という扶桑学人の一文が続く。多少売り言葉に買い言葉で、「剛腹にも飽くまで其訳語の適切なるを証せんか爲め、何か少許り原語の起源等字引様の説明を陳へられた事ハ甚だ御筆勞の至りにして……鯢鰭筆舌を勞せらるるは、畢意他を圧し自説を貫かんとする所の膚近浅薄の方術にて、出爾反爾の言の如く反って是れ自家撞着のことならずや」といい、兩訳を対称して掲げざるためとて「視るも忌まはしき甚だ野卑なる詞を用ひて頗る不滿の色を示されたり。」「斯くまで心腦を悩まざるならば……心服せしむるに足るべき価値を有する一大訳語字書なり、或は一大著述を出し自説を用い」いささるべきである。「編者もし幸に余力あらば地学に関する大著述を爲し以て天下後世に伝う可し。」（この余力あらば「一大著述」云々は原田が現業機関の管理職にあり、かつ健康が衰えていて従前ほど研究的活動が盛んでなくなつたことを、さしているのではないと言いきれない。この筆者、扶桑学人は小藤でないと言いきれず、誰であるかはわからない。）

こえてその次号（二の一四、明二三・二）の雜報には「前編集掛」（小藤）の署名で「原田豊吉氏の名論」という小文がある。「右は小生か七年前に礦物学（教科書）中に於て本邦に未だ訳語無きを以て止むを得ず造出せし文辞にして、爾来最も広く世間に行はれ最も穩当の訳なりと考定す。」「我を張らずして……、頗る鉄面皮なる処置……など於負けに圈点付きの語」があったが、すでに広く使われており、「率先の権利もあり」「今日に至りては論議上之を改むるを得ず、矧んやその必要なきに於てをや」と述べている。（長い地質学の發達から、今日では先カンブリア時代（始生、原生の二つに分ける）、古生代、中生代、新生代の語が定着している。）

この論争ともいえぬ論争は、必らずしも後年の大学と地質調査所の対立をも暗示しているわけではないし、また小藤・原田両者の個人的友情に隙を与えたものでもないようである。

以上の論文の内容や講義・雑録・雑報の多彩さは、とうてい旧来の単調な講演筆記録たる『東京地学協会報告』とは比較にならない。一方は閉鎖的な縉紳団体の非売品であり、他は開放的啓蒙的、ある意味では当時、地学愛好者にとって同志的でさえあった。会費も彼は入会を許されたとして年六円に対しては自由購読できて年一元二〇銭。一年を出ずして創刊直後の二号分は売切れ、年末には府下本所区に同名の地学会と名のる会ができて天然地理、商業地理、政治地理の独習員募集の広告をし、通信講義録を発行するものがあらわれた（地維一の一、二、明二一・一二）のも宜である。

第二―四集の地理学関係論説 以下、第二―四集の純粹の地質・化石・鉱床・地震をのぞくと、地理学の論文というようなものはほとんどないが、やや、関係のありそうなのをあげると

砂丘の説

地図学双談 Cartography

東京の地質と衛生

亜細亜東部地相

淡路の地理と地質

植物と気候の關係

横山又次郎（理科大学）二一六（四月）

大川通久（地質局）二一六（四月）三一三四（十月）

鈴木 敏（＃）二一八（六月）

小藤文次郎（理科大学）二一九（七月）

鈴木 敏（地質調査所）二二〇（八月）

横山又次郎（理科大学）二二一（九月）二四（十一月）

日本群島

Die Japanische Inseln, 126 S. を学生脇水鉄五郎、石井八万次郎等の訳したもの。四一四七(明二五・二一)まで十数回続く。本著については小藤が「日本地質に係る新著」としてかなり詳しく紹介している。(二一一九(七月) 雑録)

本邦水界の気象

政治地理篇(雑録)

地理学教授の順序(雑録)

石狩川上川地理小誌(雑録)

日本地図測量の原要を述べ併せて大三角の事に及ぶ

釧路国マシウ岳の植物帯

地図の種類と其来歴

普通教育并に学術上に於ける地理学の位置を論ず

日本海流、即黒潮

普通学校学制に於ける地理学科の地位

河流之説

秋田県地理篇(雑録)

日本の気候

日本植物帯

長野県の地貌

原田豊吉(地質調査所) 二一二二(十月) 一

肝付兼行(水路部長) 二一二三(十一月) 一三一二六(二月)

酒井恒三郎(在愛知県会員) 二一二三(十一月) 一三一二七(三月)

木下邦昌(一) 二一二三(十一月)

浅井郁太郎(北海道庁) 二一二四(十二月)

大川通久(地質調査所) 三一二六(二月)

神保小虎(北海道庁) 三一二八(四月)

金田檐太郎(大学院) 〃

金田檐太郎(大学院) 三一二九(五月)

コールマン(神戸港長) 三一二〇(六月)

金田檐太郎(大学院) 三一二〇・三一(六・七月)

奈佐忠行(地質調査所) 三一二一・三一二・三三(七・九月)

笈川栄助(秋田市) 三一二一(七月)

フェスカ(農務局) 三一二二(八月)

フェスカ(〃) 三一二三(九月)

奈佐忠行(地質調査所) 三一二三・三五(九・十一月)

若狭三方湖水疏通に関する地学上の所見(雑録)

地勢を観察する時に注目すべき事実(雑録)

我国製鉄の材料は如何

浅間山の記

寛政四年島原地変記(雑録)

日本の人口に就きて(雑録)

地理学の意義を述べて之が教授用具に及ぶ(雑録)

印旛沼堀割之説

北海道地勢総編

土佐国浦戸港の閉塞に於ける地学上の観察

隠岐群島

* 最後に余談として農林畜産業につき記し、四年周期の牧畑の説明がある。

バミール問題(雑録)

* ベーターマンス・ミツタイレンゲン四月号より。時局的な問題を外国地理雑誌よりとりあげた最初のもの

千島国最近四島

羽後の飛島

地理学と教育

右にある地理とか地勢とかいっても極めて自然叙述的な記載だけで、今日の意味の地誌、地形学、

靖南樵夫(?) 四―三七(一月)

神保小虎(北海道庁) 四―三七(一月)

大塚専一(地質調査所) 四―三八(二月)

脇水鉄五郎(地質学生) 四―三八・三九・四二(二・三・五月)

金井俊行(南高来郡長) 四―三八・四二(二・六月)

金田檜太郎(大学院) 四―三八(一月)

酒井恒三郎(愛知県会員) 四―三八(二月)

巨智部忠承(地質調査所) 四―三九(三月)

神保小虎(北海道庁) 四―四〇・四一・四二・四五(四・九月)

上田虎雄(一) 四―四〇(四月)

三成文一郎(地質調査所?) 四―四六・四七(一〇・十一月) 五一五九

(十一月)

X・Y・Z(一) 四―四六(一〇月)

自然地理などではない。自然以外のことはイギリス風に political geography といわれていたので、政治地理と訳され今日の「人文地理」にあたるが、国別の政治、社会、産業の平板な記述に終始していた。

ここで注意すべきことは、右表でもみられるように地理学に関することは、その科学上の位置などをふくめて、教育的観点ないし教育関係者によって論ぜられていることである。これは地質学や地震・気象などの科学分野とは全く違うことで、これらは学校や教育とは無関係な研究者によって論ぜられ進められている。地理学が学問研究の対象として論ぜられるよりも、より早くから国民教育上の課題として取りあげられたことは不幸なことであって、この状態はこのときよりなお半世紀以上も続くのである。

そのことはこの期間の批評欄をみるとさらに明らかになる。おかしなことには地質学関係の批評がむしろ低調で、内輪讀めの観を呈しているのに対し、地理書（主として中等教科書であるが）においては、かなり活潑なのは地質学界のような大学出身の師弟関係でなく、独学専修の士が教科書界において洛陽の紙価を高める地位を占め、それに対して大学で西欧風「地学」を身につけた人たちが批判するというケースも多かったからであろうか。

第一集中の地理学関係の批評は前掲の原田豊吉の日本噴火調（河井庫太郎論文）、頓野広太郎の日本地文学（矢津昌永著書）等でおのおの答弁・再批判があったが、第一集中の志賀重昂著、地理学講義に対する短評（一一〇、無署名であるが、編輯掛小藤文次郎ならん）は、「国粹保存旨義を抱懷し其派 Pan-Nipponists に其人ありと知られた」著者は「主として人類地理を専攻さるるが如し。」「南洋紀事を著し、近来又本邦の生産力を論じ着々通商に貿易に政事に注意し発言せるは、皆人類の地理事項ならざるはなし。」「此の一小冊子は講義の備忘録の感あり、地理の概要

を摘み目録的に列記し……教科(書)としては不足」であるが試験前に用いては「大に人の満足する所なるべし」とやんわりと書いているが、第二―四集では次のような痛烈な長文のがある。

(二―一四/明二三・二) 第一高等中学校講義、日本政治地理を読む、宮村良吉(金沢市)(評者については不詳。第四高等中学校教諭か)

明治十二、三年ころの師範学校編の日本地誌略に数字を加えたにすぎず、京都の歴史、東京の幅員、熱海の温泉、三景の記載、我日本政治地理に於て何の関する所ぞ。吾人は是を政治地理という能わず云々。第四高等中学の同講義は大いに勝る所あり云々。

(二―一二/明二三・九) 佐久間舜一郎著、日本地理正宗前編を評す 宮良生

著者は全国を腕車に乗ってまわったという。前半は天然地理にして山に五葉、川に三葉なるに風俗に三〇葉を費し、衣類髪容、家屋飲食、西洋人に示すごとく結髪の模様、画を掲げて一頁とし、蘇鉄の食法を記する等、兒戲蛇足に類する。生産はトランス・ユニオン・オブ・トランス・ポネーション・トランス・ポネーションの順に説くべきに、農工商の叙述の順序錯雑素乱が多い。工業品で陶磁器、油など産額の多いものを落している。ただ交通だけは各街道の難易、風光の明媚にいたるまで詳細に記してある。出版二か月にして再版とはいえ、斯の学の発達不完幼稚なるを示している云々。

(二―二四/明二三・一二)(三―三二/明二四・八) 秦氏大日本地誌の組織を評す 金良生、R・K生

第一編は総論、第二編は各道誌、著者は地理局員にして五百頁の大著、調査緻密精確であるが、地理の範圍を定めず濫に他学の界に犯入している。第一編は日本の邦制すなわち政治地理だというが、天然地理、民芸、美術、人、交通運輸、政体、風俗、宗教、外交等の各項は種類順序が混乱しており、歴史由来を説くだけで現状に及ばず。第二編は九章に分れているが、天然地理、道路、都邑、風俗、民芸、名勝、島州とこれまた内容錯雑、詳細という外に取り柄がなく、これが中等教育の地

理書とはいえない云々。

明一九・四・一〇に勅令をもって師範学校令（尋、高）、中学校令（尋、中）とともに小学校令が出て小学校の義務教育制が明示され、また教育普及の風潮にしたがい、おそらく各種教員の需要が多かったのであろう、各種の地学関係の教科書が出版された。それには旧式のものもあり、新式を標榜したものもあった。鉱物学や地文学は多少の誤解誤訳があったとしても、大体西欧科学の方法に従ったものであるが、政治地理（今の人文地理）、地誌は新旧入りみだれていたし、著者も大学教授から新進の学士まであり、あるいは力行専修の士であった。しかしとにかく、多少の専門をもつ尋常中学校の教師がたりないので、高等師範学校のほかに帝国大学理科大学にも簡易科という制度が設けられた。

これについて――一〇雑報に次の記事がある。筆者は小藤文次郎であろう。

「元来地学の学科たる中小学に課程として存しあるも、近頃迄は（西洋においても）大学に地学教授の椅子なきは誰人も承知し居ることなり。斯く地学を世間一般緊要視せざるより、人の之を深く研究するものなし。左れば斯学に大学者を出さざりしが、近來この学風一変し、其家元は独乙にあり、英国などは万事、保守風に吹され容易に旧套を脱せず、然る故に假令新板の地理書と雖とも、英国人の脳産物は皆従來の学風あり、本邦にて新を争ひ英版の地理書スチワルト、クラーク氏等の書を翻譯するも猶依然として古風の目録の地理書たるの外ならず、吾人常に爰に遺憾の思ひありしか、今般、理科大学に於て簡易科の創設あり、其課目中に地学ありて、地文、政治地理、地質、鉱物学科をも教授さるる由なれば……」

ドイツ風の *Erkunde* を推賞することとはとにかく、イギリス地理学が旧式ということで受け入れられぬことは、

大正・昭和戦前まで続くのであるが、この簡易科の第二部は動物学（箕作・飯島両教授）、植物学（松村・大久保両助教授）、地学（小藤教授・菊池助教授）、天文学（寺尾教授）を二年間で修めるものである。ほかに随意科目として物理学・化学・地震学がある。地学の内容は第一年に地文及び地理（三時間）、第二年に鉱物・地質・実験（四時間）。こういう教育課程のなから政治地理（人文地理）や地誌の正しい知識の導入のなされないことは想像でき、これが大正期以後の理学部系の地理の原型となったものである。

三、小藤文次郎の地理学

明治二十年前後、日本人で地学関係で西欧の事情に通じていたものは、開成学校時代から雇外国人教師の下で働き西洋の学会にも出た経験のある地質局長兼理科大学教授和田維四郎、少年時代からドイツに留学してドクトルの学位を得て明一六帰国した地質局長兼理科大学教授原田豊吉、それに最初の地質学科卒業生で三年間のドイツ留学を了えて帰国した帝国大学教授小藤文次郎の三人である。

しかし和田、原田の二人は鉱物学、地質学から一步も出なかったのに対し、小藤は帝国大学理科紀要に岩石学・地質学・地震学などの英文の論文を次々と発表するとともに、地理学に対して興味をもっていたためか、初期の地学雑誌に種々の論稿を寄せている。それは在来の東洋的な内務省地理局風の地理学でなく、ドイツで読みあるいは見て身につけてきた地理学であった。以下、それを順次あげて彼の地理学論をみてゆきたい。⁽¹⁸⁾

(18) 地学雑誌発刊前、ドイツから帰国後、明一九、理科大学講師時代に小藤は東京教育博物館で地文学について八回の講演を

行い、日本の例をとり入れながら新しい科学を紹介し（東洋学芸雑誌所載）、また明二〇、大学通俗講演会および東京地学協会で「日本の旧世界」を話した（同誌および東京地学協会報告に所載）。（山崎直方、小藤博士と地理学、地理学評論、二、大
一五参照）

地学雑誌発行ニ付、地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス 地学雑誌一—明二二—一

創刊号開巻劈頭の論説である。「地理学ハ地球ノ記事ナリト」してそれを「蒐集配列セシ一種目録的科学」と信じて疑わぬものがある。草双紙風の地理書や地名字彙、脈絡なき諸統計を併載し「国土ノ天然ヲ全ク論究」しない。これに対し博物学の興るとともに地球の天然を研究する一派があらわれ、星学・地質学と関係の深い地文学ができ、また邦制上の地理は歴史学・住民学と交渉が深まり分離し得なくなる。故に当今の学者は昔の地理学をやめて地学[Erkunde]の名を使うべきである云々と、天然を考究する地学を提唱している。そして地理学の問題を分類すれば、

(甲) 地文学 Physical Geography

一、地球ノ物体、二、形態（地球ノ形状）、三、水誌（水ニ関スル万般ノ事項）、四、氣候（空氣ノ現象ニ関スル事）、五、動物地理、六、植物地理

(乙) 人類地理学 Anthropogeography

一、人類ノ播布、形象、大小ニ関スル諸起因、二、人類ノ散布、及社会（国家）

〔普通地理学、地文学、地質要論、地学などの内容もはっきりしないし、右表の地文学と人類地理学との関係も明らかでないが、末尾の「本会々員ハ……地学ニ更ニ地質学、鉱物学ノ二大科ヲ加エ……本雑誌ハ三科ニ関ル事項ニ就キ考稽査ノ結果ヲ登録」云々の一文から地学（地理学）・地質学・鉱物学の雑誌たらしめんことを期していたらし

『地学雑誌』——創刊（明治二十二年）より関東大震災まで

いが、これは小藤その人だけの希望・意図であつたのか、他の会員は地質学だけの専攻者であり、関心者であつた。」小藤は一集二号の批評欄で、物理学術語字書を取りあげ「吾輩ノ専攻スル地理、地質及鉱物ノ諸科ハ地球ニ関スル物理学ニシテ」と述べており、地文学はとにかくとして人類地理学がどのような位置にあるかには言及しない。また同号の「地学雑誌に就き大方有志諸君に懇望す」の一文でも、温古家流の山海の珍奇、名家系譜、古流の翻訳にかかると目録様の地理はすべて真の地理学でなく、師範学校の卒業生と雖も此の範圍を脱せずといい、纏つた地理学は嘉永の頃より欧米から輸入され、内田氏翻訳の興地誌略はその先導者である。独人ライン氏の日本地理書新著述されたるも知るもの少なく、内務省の地誌提要も一の統計記録に過ぎぬと評している。

普通地理学講義（一集一月号より二集一月号まで九回連載、累計七四ページ）

小藤の地理学の体系を示すものである。序文によれば「毎週二夜、大学地質教室ニ於テ地理学ノ講義ヲ思ヒ立テ：：：簡單ナル地理ノ大意」を口述し学生金田檐太郎・浅井郁太郎・細川兼太郎が筆記したものである（後には細川のみ、さらに後には口述でなくなつたらしい）。その構成は、

第一編 数理上地理学または地球星学 Geonomy

第一章 地球（地平、地球ノ形像、地球ノ五帶、経緯度）

第二章 太陽系（地球ノ自転、地球ノ運行、天体ノ運動）

第二編 地文学 Physical Geography

第一章 地理ノ大意または地理ノ元素（陸、水、空気）

第二章 陸洋汎論（陸地及七海洋、大陸ノ位置）

第三章 大陸地文要領（歐羅巴特論、亜細亞特論、亜米利加特論、阿非利加特論、濠斯太良利亞特論——各節にさらにおのおの位置及ヒ境界、半島、島嶼、地面ノ形状、河、湖、氣候の各項に分けて記述される）

第三編 政治地理大要

甲 歐羅巴部（大不列顛王国、スカンデナヴィヤ王国、丁抹王国、阿蘭王国、白耳義王国、仏蘭西共和国、西班牙王国、葡萄牙王国、瑞西共和国、独乙帝国、魯西亜帝国、洪牙塊斯太利亞帝国、意大利王国、希臘王国、バルカン諸邦）

乙 亜細亞部（北亜細亞、東亜細亞——日本帝国、支那帝国、朝鮮王国、南亜細亞、西亜細亞）

丙 阿弗利加部（ナイル河諸邦、バルバリー諸邦、スーダン、南阿弗利加）

丁 亜米利加部（北亜米利加——合衆国、中央亜米利加、南亜米利加）

戊 濠斯太良利亞部（陸地、島）

八十年前の大学生に対する講義を今日批評することは、コロンブスの卵以上の無智であるが、第一編の数理地理、第二編の地文学の記述とその内容は大体、今日の中学教科書と同じである（じっさいは日本の教科書はむつかしくて、半数以上の生徒には消化されぬというから、高校生の理解に適する程度であろうか。）とくに大陸地文要領と政治地理大要は全くの平板な記述であつて、前者は地図をみて山河海灣湖沼をのべるごとく、後者は著者の屢々言うところの「目錄的」「統計記録」の観がある。数理地理・地文学の二編は当時の日本の教科書よりは数等すぐれているのにくらべ、連載があまりに長くなったためか、第三編政治地理大要はむしろ簡に過ぎて付属物の観がある。かつ全体としてみればヨーロッパに詳しくアジアその他についてはまことに簡単である。イギリス三二行、ドイツ二八行、フラ

ンス一八行に対して支那帝国（中国）二二行、朝鮮五行である。これらの記述を明治初期の内田正雄編「輿地誌略」と比較し、あるいは昭和戦前および今日の高校地理教科書の各国の地誌的記述と比較すると興味があるが、繁に過ぎるので省略する。

なおこれより四年後に地質学雑誌に載せられた一文が、この政治地理大要（地誌）を補うものとも思われるので、ここにふれておく。

支那地誌 地質学雑誌、一卷二・三号（雜録）、明二六、一一—一二月

構成は序言として政体の組織（帝室部、中央部、地方部）を説き、総論は一、位置及地貌、二、河湖、三、物産工業及び教育、各論は政治上の区劃を、支那本部・西藏・伊犁・満州・蒙古・島之部とする。

前の普通地理学講義の第三編における支那帝国二二行よりはずっと詳しいが、本質的には歴史と現状の平板な記述であり、それも日清戦争前においては独自の調査というものはなく、清国の一統志・地理誌を資料とするより外はない。自然なり文化なり生活なりについて、一つの考え方、見方があってそれをその土地について実証し論究する意志がなければ、地誌は平板ならざるを得ない運命をもつ。「目錄的科学」を徒らに排撃できないわけである。

日本地文学を評す（一集四号）

矢津昌永の日本地文学の序文は校閲者小藤文次郎の筆になるが、それをそのままのせたもの。「近来ノ傑著」として賞賛至らざるなしという一文であるが、このなかに小藤の地理学論の一端がある。

……地文学書世甚ダ多く、汗牛充棟言ナラザレドモ真正ノ地文学書ニ至リテハ又寔ニ見ル事罕ナリ……地文学書ハ恰モ百科会

書ノ如ク、又群書類從ノ如クニシテ、徒ニ造家ノ材料ノミヲ論シ大厦高樓ノ構成、建築法ノ如キ重學上ノ事理ヲ究メシ類ニ非ラス、曩ニ独ノリッテル氏アリ又ベッセル氏アリ、出テ、斯學ヲ説キ後リッテルノ門下ニ瑞西ノジョー氏（注 Guyot）出テ去リテ遠ク北米ニ移リ、哲學的ノ地文書ヲ著述ス、今猶ホ本邦ノ庠序ニ於テ之ヲ教科書ト為スモノ尠カラズ、然ルニ晩今阿弗利加内地探究ノ舉アリ、尋テコンゴール王国興リ、其影響ノ及フ所、地理學上ニ振起ノ時機ヲ促シ、大ニ地文學ノ開発ヲ誘導セリ、今様ノ地文學ハ人類ト活氣運動アル其外界ノ情態ヲ悉ク網羅シ、考驗稽查スルノ云ニテ……

普通地理學講義（一集一一五、七一八、一一、二集一三）

この「普通地理學講義」⁽¹⁹⁾は時を同じうして掲載された鈴木敏の「地質學講義」（前半は東京哲學館における講演、一集六一〇月、二集五—八月）が理論的科學として「地質學を修むる方法及び地質學の積義」（緒言）を説こうとしているのに対し、地理學の方は半分は現状の叙述に終始している。ここに江戸時代から明治大正時代にかけての姿勢がある。

（19）これは「地理學教科書」として序文と図版を増加して刊行された。二集六月号に門弟仰天子の賞賛の批評がある。

なぜ地文學とならんで政治地理という国別の記述がつけられねばならぬかということについて、著者には疑問がな⁽²⁰⁾いらしいのは当時、世間一般の「地理」がそうであつたためと、著者が自然科学者であるためであらう。地球に関する自然科学者としての著者は従来の「地理」に地球の自然の研究をつけ加えるべきであると考えたのであらう。あるいはそれに重きをおくべきであると思つていたかもしれない。それは後述、「阿波地理小誌」の末尾の左の一文にもみえる。

「終りに一言し置かざるを得ざるは、本書中に地質の事柄割合に多きことなり。旧来の地理書に読馴れしものは、此間に多少疑を抱くべきも、当時新鮮根柢の地理書は往時の地理書筆法と霄壤の差あり、閲読中此点に注目あらんことを又々望むものなり」(集一〇)

(20) これは自然地理と人文地理がなぜ地理学という一つの学問分野に属するのかという問題で、これについて地理学者自身が明白確固たる解答も自覚もたないで半世紀以上を過ぎてきた。大学の地理学科・地理課目が理学部にもあり文学部・経済学部にもあり、これは創始の年代や創始者の専攻などによることで欧米にも例が少なくないが、これを各自自分の都合のよいように解釈して、地理学全体を考えなかったのは、日本に近代地理学の伝統が欠けていたからであらう。

たまたま一九六九年暮に文部省科学研究費の申請区分を、文部省研究助成課は日本学術会議の従来区分(第一部理学と第四部文学のなかの史学におおの地理学・人文地理学があった。ほかに第三部経済のなかに経済地理学がある)と異なり、七部のほかに「その他」の部として家政学・保健体育・原子物理学・生化学などとともに地理学をふくめた。「地理学は一つ」というシロウト的ではあるが、ある意味では正しい認識であるが、一つの行政的措置としてとられたため、それについて平生、考えていなかった大部分の日本の地理学者たちは、あるいは虚を衝かれて狼狽し、あるいは雄学扱いされたと憤激して、訂正復旧をはかっている(七〇年五月)、一面、日本の官庁組織による学問の分類区分など無意義とはいえ、これが予算規模の基盤になること(理科系に属すれば文科系の二―五倍の予算がつくなど)を思えば、当事者としては超然としていることもできないことでもある。

阿波地理小誌 (一集六一九月号)

前記の「普通地理学講義」の間にはさまって、もう少し具体的な対象と内容をもった論稿である。これは徳島県第二部長から小学校教科用の阿波国地誌編纂のため、「地質の概略、火山及び其脈、諸山の高さ及諸駅所在地の高低、諸山脈を構成する岩石の種類」等、先般当地巡回中取調べたことがあったら送ってほしい云々と依頼されて執筆したもので、著者執筆の方針は

元來、地理書とは地球を人の棲家として論ずる学なれば、之を修めば（一）其地の氣候住人に如何なる影響あるや、（二）如何なる特産を以て活業を営むべきや、（三）我が寓する家の地下は如何に出来しや、（四）山川河海は如何に交通、運搬に利用す可きや、（五）過去に地方の住民は如何なる経歴ありしや、（六）之を推して将来は如何なる進路を取る可きや等、其地方の地理を學んで終身其智識を活用す可きものなるに、現行の管内地誌を學んで果して其目的を達し寸分身を利す可きものあるや否やは、今日の筆法なる地理書を修めし人に問はば自ら明かなるべし（下略）

こういう意図の下に次のような目次である。

第一編 地文 Physical geography

結言 一一二（全篇通しの項目番号）

第一章 地貌 Orography（中帯・南帯・境界山脈・造山力）三一—九

第二章 水誌 Hydrography（一〇—一一）（吉野川灌域二—一四、外吉野川灌域、甲、勝浦川灌域、乙、那賀川灌域、一五—一六）

第三章 氣候 Climate（土佐氣候 瀬戸内氣候 平均温度 風ノ方位 湿氣 降雨量）一七—二三

第二編 人類地理学 Anthropogeography

第一章 住民發育略史 A history of evolution of the inhabitant（日本ノ興廢 地貌ト文化ノ進跡 皇子下国 殖民ノ進路 中世沿革 阿波ノ十郡）二四—三一

第二章 職業 Occupation of people（地貌及ヒ氣候ト物産ノ關係 農業 作藍 漁業 工業 坑業）三二—三四

第三章 殖民及ヒ交通 Colonization and Communication 甲、吉野川域内殖民交通（徳島 脇町 祖谷山 池田 白

『地学雑誌』——創刊（明治二十二年）より関東大震災まで

地)三八―四四、乙、外吉野川域内殖民交通(小松島 正木石炭 木頭上山分 富岡 海部郡 海部地貌ノ不規律 日和佐)四五―五四

第一編地文のうち、とくに地貌の章は著者の独壇場であり、日本の地帯構造のなかにおける四国山地、阿波国の山地を説明叙述しており、第二章水誌はそれを受けて横谷・縦谷を説くところ、従来の各県地誌書や日本地誌略には見られないことであった。しかし第三章気候ではアジアのモンスーン気候から瀬戸内気候 *Setouchi Climate* を名称として提出しているが、何分にも徳島県内に測候所の一つもない時代であるから、数値的には漠然たらざるを得ない。

第二編人類地理学になると、第一章、住民発育略史というのは歴史であって、神代より現代までを五期に分け、吉野川流域七郡は讃岐側より人口来住増殖し中世以降、日本文化の中心に近きも地勢上、他国と交通せず辺鄙であった。近世封建太平になって「溫柔の氣質を慣養する」ようになった。しかし南部の山方三郡は古くして人口が少ない云々。第二章職業は産業で、農業では水害と米麦養蚕をあげ、作藍だけ別に一節を設けたのは特産の商品化作物であるからであろう。漁業はわずか四行、工業は蚕業(繭・真綿)、製茶、甘蔗製糖、製塩等の地名と数量、あとは織物業(絹・木綿)について二行分の記述があるのみ。坑業(鉱山業)は専門家らしくやや詳しい。

第三章殖民及び交通は諸都市の歴史沿革や産業現勢を説きその交通路を述べる。祖谷山の項ではその交通不便を説いて村落の遺風にふれ、ギボンの羅馬衰頽史にならない、「本邦中古の歴史を編まんとするものは、須らく筆を携え此の地に來り旧時の遺風を目の当り思忖し著作に就くへし、当時阿波の土風崩潰す、予此地に到り朴訥毅剛の潜質を視、転た欽慕に堪えざるなり」といっている。

以上みるように、第二編人類地理学（今の人文地理）に入ると、ところどころ旧来に見なかったところもあるが、また従前の様式が下敷きになっているところもある。また「普通地理学講義」の項末に記したように、地文学と邦制地理あるいは政治地理あるいは人類地理学とどういう関係にあるのか、単に並存平行するのか、それとも並置させる統一原理があるのかについては一言も費されていない。もっとも本稿の末尾「付言」には「生義客歳四国中帶山脈を地質調査の爲め巡回せり、然れども日子に限りあり又渉獵の範圍濶大にして阿波国を普く巡遊せず、且つ本務は地質測量の事なれば、地方の人民歴史、職業、交通の狀態を詳にすること能はざりしは遺憾の至りなり、故に本書諸般に就き杜撰を脱れず、粗漏の責は甘受する所なり（下略）」と断っている。地質学者といえはハンマーをもって岩石をたたき走向傾斜をはかり化石をさがす人ばかりの間にあって唯一人、小藤文次郎が地理学、とくに地文学（自然地理学）のために東道の勞をとったことを記憶すべきであろう。

学校地理に対する不満 「地理」といえばすぐ種々雑多な地名や数量が思い浮べられるのは、明治初期から各種の地誌略が流行し、それが地理学にとって何らの素養もない地理家や教員によって学校教育にとり入れられたからであろうと思う。江戸時代には統計事業がまだ発達していなかったから、地理書は明治以後のごとく数字を羅列せず、その代りに当時の地理書は歴史の付属物であったので、沿革・系譜・社寺・遺跡等については必要具備条件であった。これを小藤文次郎は「目錄的臭味」と称しているが、この風潮は時の文部省や学校教師からなかなか抜けなかった。地学雑誌の雑報にも折々、その批判が見えるが、帝国大学地質学教授の意見では教育を掌握している文部省や高等師範には馬耳東風であつたものであろうか。

「先々月末（明二・四）に或る官立学校」で生徒募集を官報や諸新聞に広告したのに、数学は何まで何科は何までとその程度を示した内に、「地理科の入学試験は山川の位置、都会の名称を試問す可し」とあった。これを地理学の要領とするのは実に脆き大謬見で、数学で対数の数字を暗記せよというに等しい。「地理学の諸要領を掲げんとならば、地文とか人類地理とか記入すべし、猶ほ細かにせんとなれば氣候、動植物の播布の模様、空氣、海陸の分ちとか……人類地理に関しては国の特産、交通の有様、国の貧富、宗教の要領、政体の種類等にも宜しかるへし云々」（一集六月号）

「我国に於て地理学教授の方法、其宜を得ざることは本雑誌に屢々陳述」したが、五六の官立学校の試験問題をみるに「教官に向て不平、否道德上の譴責を与へざるを得ず」として、その数例をあげ山川の位置、都会の名称に止っている。地理教育上、無味無益で有害であり、地理の試験は廃止した方がよい。これに対して「今府下に有名なる私立学校（石田注、早稲田の東京専門学校か）の試験問題は前述の目録的のものよりも遙に優等にして、例せば○降雨多きは何れの地方なるや其理由を述ふべし○亜細亜の重なる国名、其首府を挙げべし○我国と清国との間、船舶の往来する港湾を挙げべし○我国に輸入する主なる物品多くは何れより来るや、其国名及品目を挙げよ等なり云々」（二集一月号）

おそらく当時の高等師範や高等中学の地理学教授の実情を示すものであろう。（後述の神保小虎の「素人の地理学」その他を参照せよ。）

読者の質問に B. K. の署名（小藤文次郎）で答えたものがある。「某県小学校教員学力検定試験には地理科を尋

常地理（地文学を除く）而已に止り、地文学を動植物物理化学に編入して施行」しているから地理科は地文学なくして及第するが如何なものかという問に対して、それは検定委員の大なる粗漏で、「今日まで政治地理を尋常地理と命名せしものを聞かず、尋常地理とは即ち地文学にして地理の全般を論し、地理特論は即ち政治地理なり……地文学を動植物物理化学と交混するは世間の通弊にして……地文学は地球の生理学にして……博物、理化と同視せば政治地理は社会、経済、人種、物産、宗教、語学と同視せずんばある可からず」故に政治地理のみを検定するのは片身の検査で、「何ぞ地理学の学力を考試せしと云ふを得んや、況んや小学校の地理科は地文科を主とするに於てをや」と結んでいる。

小藤文次郎の地理学論の筆法の模倣者は、地学雑誌の上だけでもいくつか見える。

政治地理篇（愛知県）

酒井恒三郎 二集一一・一二月号、三集二・三・五月号

秋田県地理篇（秋田市）

笈川栄助 三集七月号

飛騨国地理小誌

佐藤順造 六集八・九・一〇月号、七集一・一〇月号

しかし小藤の地理学論は地学雑誌でみるかぎり、第二集の前半までで、後は自然（地文学）に関するものとして「亜細亜東部地相」（二集七月号）のみであり、論文は地質学に限られそれも後述するような事情から、地学雑誌には全く見られなくなった。

金田樟太郎の地理学の分類論

小藤に代って地理学について論じたのは、金田樟太郎であった。彼は地質学科卒業後、大学院に籍をおくとともに、高等中学校の嘱託で地文学を講じていたが、大日本教育会においても地理学科の位

置について議論があつたので、教育上の観点から地理学の位置を論じた(三集五・六月号)。地理学の科学上の位置は小藤の創刊号冒頭の論をくりかえし、E. Cortambert (Bull. Sci. Geogr. Paris 1882) にしたがひ、天然科学(自然科学)と人文科学(人文科学)の間に *Sc. physico-morales* として地理学があり一方に天然地理・地形学・地球星学、他方に政治地理・経済地理・風俗学・統計地理・軍事地理・歴史地理等をふくむとする。

普通教育において国誌を読んで愛国心を、万国の地理を学んで博愛主義を解し四海兄弟の念を生ずるために、地理教育が必要といふ、ドイツ・ベルギーの高等中学の地理課程(表示)に比し日本は格段に時間が少なく(予科の一、二年と文科一年にのみあり、予科三年・文科三年及び理科には全く地理学がない)、むづかしい化学・物理学が彼は一時間少なく、天文学・経済学・哲学のごときは全然なくして、日本の高等中学にあるのは如何という。

このあたりが学校地理教育の一つの形成期で、明二三・一〇旧小学校令が改正され、おそらく文部省の諮問をうけて大日本教育会は明二四・四帝国大学で小学校令第三条(土地の情况により教科目に日本地理・日本歴史を加ふることを得)の実施方法と程度を議し、一、地理歴史科と一科目にして修業年限四年の学校に限る、二、三年級で学校近傍より管内地理、本邦地理の大体、四年級で前年より程度を高めて更に本邦地理の大体と歴史上の事迹を付説する、三、地理を基礎として歴史上の事迹を付加する、歴史は編年史体、文明史体等でなく伝記体に談話口述することときめた(三集六月号雑報)。金田は尋常教育における地理学科をドイツとベルギーの各種学校について述べ、その内容を紹介した(三集七月号)。また金田は後記するごとく第五―七集にも地理学の分類、人事地理学(人文地理学)について寄稿しているが、今日いうところの地理学的研究論文はないようである。

四 地学雑誌の地学協会への移行

地学会の消滅と東京地質学会の創立 明治二十五年暮になって、地学会と東京地学協会との合併談が出てバタバタと決定してしまつた。これは前稿に述べたように執筆者は多数いてその地学雑誌は十分に売れているが資金に余裕のない地学会と、資産は十分あるが協会運営の積極的推進人物や協会報告の編集、講演・執筆者の不足に悩み、あるいはむしろ創立当初の雄勳なヴィジョンや行動力を失つたかのごとき地学協会とが結合したものであったが、地学会の正員全員が心から賛成したのでもなかつたことは、半年たらずして明らかになる。

(21) 雑誌代だけ払いこんでいた准員とちがい、大学・農商務省の職員・卒業生たちで、地学会の構成中心人物である。その数は前稿にも述べたごとく二九ないし三〇名である。

すなわち合同の話は十二月十三日に双方の協議委員をきめ、地学会は十二月十九日、地学協会は十二月二十五日におのおの決定しており、翌明二十六年一月、地学雑誌第五集四九巻より地学協会の発行になっている。しかし同年五月に帝国大学地質学教室を中心に東京地質学会が創立され、十月より地質学雑誌が月刊で発行されることになった。この間の事情の一端は後年、小藤文次郎が(地学雑誌の由来、地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五・一〇)

……当時読者広き地学雑誌を協会の報告に併合せしは明治二十五年六月なり、斯く地学雑誌が地学協会へ不合理に転籍されし結果として、大学地質学教室に於ては新期の地質学雑誌 Geological magazine を起し、月刊初号に予は此新學術雑誌の目的内容を述べ……

と記していることから、知ることができる。もっともこれは同教授の晩年の所感で誤もあるが、「地学雑誌」は「協会報告」と合併したのでなく、その後四年間も両者は併行して地学協会から出版されていたし、両会の合同は六月でなく十二月であるなど）たゞこの合同を、広い読者をもっている地学会の地学雑誌が「地学協会へ不合理に転籍され」たと考えていたことは、偽りのない所見、何十年後までも持ちつづけられた感想であったのであろう。小藤その人にとってみれば、自分が生みの親であり育てた地学雑誌が、地学協会と取引きされて身売りしたようにも感ぜられたのであろうが、原因は別のところにもあるように思われる。

それは同じ地質学を対象ととしても、大学における研究中心のなと、現業官庁（農商務省地質調査所）における調査中心のなとの差である。両者の分離的なきざしは、すでに合同前からなくはなかった。

たとえば研究例会。地学会は古くから月例の会合を開いていたが、明二・七、地質局において地質局次長原田豊吉が九州の対曲を演述し、小藤文次郎が意見を述べたのを最後に、九月には地質局内にあった事務所を他に移さざるを得ることになり、以後編集の役員会は神田猿樂町の事務所や三河屋で開かれたが、地学会の月例会はずっとなく、明二三中には二月に大学地質学教室で横山又次郎・奈佐忠行報告の一回のみ、明二四になってやはり大学で一月に金田・神保、二月に浅井・神保とあり、四月号になると地学雑誌に新たに「地質学談話会記事」という一欄が設けられ、三・二、三・七、三・一六、三・二二と大学地質学教室で小藤教授、大学院・学部学生らの報告（主に外国論文の紹介）がつづく。これに対抗するかのごとく地学会例会も三・二七に地質調査所で行われ、本邦産砥礪材（巨智部忠承）、顕微写真術（伊沢雄司）という、いかにも現業官庁らしい報告があったが後は続かず、大学の地質学談話

会の方は第一四回同年六・二二まで毎週一回の記録がのせられており（三集四・六・七月号）、報告者は相かわらず毎回、小藤教授のほか金田・浅井・山上・脇水の諸学生であり、報告の内容も大和民族は代議政体に適するや否やの質問につき地理学上の答、結晶の分子構造、蛇紋岩の成因説（小藤）、地勢の人心に及ぼす影響、月と太陽斑点の気象に及ぼす影響、十九世紀地学の進歩（金田）、陸水の運動、ヒマラヤ山脈生成の時代、リントゲン氏石英電気性研究、地理学と歴史の関係（山上）、石油産出状態、埃太利亜州地質の概要、ロッキー山東麓の地貌、気候の変化に就て、極光（脇水）、岩石の球状構造（浅井）等々であった。その後の開催やテーマは第三集（明二四）後半には記載してないが、これはその後、何百回と続いた談話会の発端であろうか。⁽²²⁾ 私など大正の末期、地理学科の学生だったころ地質学とまだ明確に分離もしていなかったので、時々、この毎週月曜日夜、東大山上御殿で開かれた談話会の末席に出て、諸先生や地質卒業生の方々の話を聞いたことがある。とまれこの大学のゼミナールの色彩の地質学談話会と地質調査所の所員ら関係者の調査結果の報告会的な地学会月例会は、性格においてもちがったものであり、それが大学と調査所との関係でもあった。

(22) 毎週の地質学談話会は地学雑誌でみるとこの通りであるが、小川琢治は別の記録を残している（雑誌「地理教育」昭一〇ころ、歿後「一地理学者之生涯」に編集）。

「教室の月曜日の晩に開く談話会は同級生五、六名が、弥生町石井（八万次郎）氏の真黒な洋式住宅に集まってジャン拳で焼芋買いに行き、且つ食い且つ談るのがその起源だといひ、我々が加わり十名となると共に竜岡門内の学生会事務所で、化学や物理学の教官学生の集まって雑誌を読む会並になった……当時は先生を抜きにした学生ばかりの無礼講で石井・山崎両氏が牛耳をとり、火山踏査の話がはずみ……先生の臨席は神保先生がはじめて稀に小藤先生の来られる様になったのはズント後にな

ってからであった。」

小川琢治の大学に入ったのは明二六であり、その前から石井宅で開かれていたようであり、前記の地学雑誌にある談話会は明二四で教室で開かれているから、両者は別のもので、昭和まで続いたのはこの方で、前者は地質学会になったのであろうか。

そういう研究・調査の視点のズレに加えて、多少の感情的な齟齬もあったものか、これがやがて東京地学協会と東京地質学会、地学雑誌と地質学雑誌、農商務省地質調査所と帝国大学地質学教室とが対立するかのとき観を呈することになった。

小藤文次郎はかつて原田豊吉の *Die japanische Inseln* をかなり詳しく紹介したが（二集七月号雑報）、今度は原田は小藤の *The Archæan Formation of the Adukuma Plateau*（帝国大学紀要、理科第五冊）を批評した（五集三月号批評欄）。これは今までの地学雑誌の批評欄に多かった地理教科書の構成や訳語の論難と異なり、地学雑誌はじめての本格的水準の紹介批評であって、文中に「予は嘗て三波川層を視て太古界上部に属するものならんと臆説せり、今や小藤氏は之を非難し此説を評して倉卒なる判断なりと云う、予は現に尚ほ此説を固守す、如何となれば……」と論じている。ところがその説の内容に対してでなく次号雑報欄に「按摩的の批評」と題して、「原田博士は縷々数千言を臚列して小藤博士の新著を批評せり、而して評者は自ら言ふ、斯る批評を按摩的と称すと、即ち初めは撫で廻し次に叩き最後に急所をギョッと押すと、知らず著者は之に答ふるに外科的の荒療治にても用ひらるゝにや云々。」という意味でこういう雑文が無署名で入ったのか知らぬが、地学雑誌の編集子、おそらく地質調査所関係の人の手になるものであろう。大学と調査所の感情の行きちがいの一片を示すものかもしれず、またあるいは当時の同人誌的感

情からか、または原田豊吉その人との親しさの余りの揶揄的一言かもしれない。

とまれ地学会の消滅、地学雑誌の転籍は小藤文次郎にとっては淋しいことであり、大学中心の地質学会創立の事情は次のように伝えられている。

「此の合併問題は調査所員は可とし、小藤先生は賛意を表されなで、協会員になってゐられても、約十年の後、私が故神保先生と共に協会主幹となった頃から時々顔を見せるまで集会に出席されなで。此の小藤先生の地質学専門学会の消失を遺憾とされたのを付度して石井（八万次郎、当時、大学三年）・山崎（直方、二年生）等の諸氏が別に地質学会を創立することになったものと思はれる。」（小川琢治「一地理学者之生涯」）

「この結果（注、地学会の消滅）たるや、地質学の研究を主要の目的とする学会の喪失を意味するから、同年（明二六）東京大学地質学教室を中心とする東京地質学会が組織さるに至ったのは、当然の成行であつた。」（小川、地学雑誌創刊以來四十二年間の本邦地理学界の回顧と前途の希望、地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五、一〇）

こういうわけで小藤文次郎はもっぱら理科大学紀要と地質学雑誌・東洋学芸雑誌等に論文を執筆し、地学雑誌には書かず、地学協会の会合にも出席せず、ついに明三一、鈴木敏とともに退会してしまつた。しかし地質学科の卒業生たちは、大学に在るものも地質調査所に職を奉ずるものも、双方の雑誌に寄稿していた。もつとも編集は割然と大学と調査所とに分れていたが。

後年、おそらく後輩の井上禰之助（協会主幹、かつ地質調査所長）らの勧めによつてであらう、小藤は明四一・一二、鈴木は大・一二に再入会しているが、小藤はついに論文は執筆寄稿しなかつた。ただ、この退会中の期間に、韓国南部の地勢、朝鮮北部の地勢の二論文が「官報に公表された文部省への報告」として転載されている（一三集明三四、六一七月、一四集明三

五、六―七月、後年、大学紀要にのった *Orographic sketch of Korea; journeys through Korea* の元の文である。）

東京地質学会は大学の地質学科の学生が毎週土曜日午后に開いていた地質学談話会を「拡張」してできたもので（地質学雑誌、一の一雑録）、地学協会の地学雑誌と似たようなものであったし、その上、大学と地学協会・地質調査所との関係もあり、疎遠な空気があったことは否めない。（ここに大学というも実は小藤教授で、同じ教室の横山教授は合併に賛成で地学雑誌の編集委員ともなり、終生、寄稿されていた。⁽²³⁾）

(23) 横山又次郎 (1860―1932) 東京大学予備門第一回卒業生で、明一五、理科大学地質学科卒業。はじめ地質調査所でナウマンにつき、明一九、文部省よりドイツ留学。ミュンヘンで古生物学を学び、明二二、帰国して原田豊吉の後を襲って理科大学教授。大二三退官。古生物学の研究にその生涯をかけたが、その通俗化にも努め、「前世界史」(大七)、「古生物学綱要」(大九)は他に類書がないので長く読まれた。

晩年、私が地学雑誌の編集委員の末席に連つていたころ、社会的な問題について毎号科学的随筆風のことを寄稿した。当時、若年の私などは多少疑問に感じていたが、今、次のような文章をよんでみると、地学協会のあり方を正しく見ていたのかもしれないし、この言葉は今もそのまま当るかもしれない。

「震災後は記事が硬くなって、且一方に偏する傾向を生じてきた。それは事情已むを得ざるものあって然るに違いないが……硬い地学会誌を捨てて之を硬軟相半する地学雑誌としたのは、弘く世間を相手とする為であった。又協会設立の大趣旨も前に掲げた通りのものである。尤も今日の局に当っている人々は、之を知らないのかも知らぬ。知らなければ今之を知るも宜しかろう」(地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五、一〇)

地質学会の創立趣旨は地質学専攻の学会であると同時に、隣接学科もひろく包含しようとしていた。(地質学雑誌、創刊号表紙うら、稟告、五号まで連載)

……本誌専ら地質学の専攻を以て任ずと雖元來斯学科の範圍浩遠從て之と相伴隨し相關係する学科亦尠きにあらざる、鉱物學、古生物學、地文學、地理學（政治地理、商業地理の如き總て此の中にあり）、地震學、探鉱學、冶金學、生物學、人類學の如き皆斯學研究の爲必須の資を具ふるものなり、されば本誌又勉めて此等学科に就き有益の材料を撰び以て斯學攻究の裨補たらしむべし……

地學雜誌は誌上に「地質學雜誌の發兌」（五集、明二六、一一月號雜錄）を報して次のごとくのべている。

從來、理科大學地質學教室にては土曜日毎に地學談話會を開き、教授學生諸氏が自己の研究せし結果を報告し或は外國雜誌を翻譯して之れを演說する等のことありしが、數月前之れを擴張して地質學會なるものを組織したり、……稟告に於て本誌は地質學・地理學・地震學・人類學の諸科に就き有益の材料を撰び登載すべしと述べたり……

其の主意とする所は我が地學雜誌と一點の異なる所なし、編者は眞に良友を得たるを喜ぶ……愛妹の生誕の爲めに一大白を挙げ健康に生長せんことを祈るものなり

としているが、続いて別の見出しで「奇怪なる明文」として東洋學芸雜誌（一四五號雜報欄）がこの新雜誌を披露するに、「從來、地學雜誌と稱し大學地質學教室關係の人深く携提^{（イ）}して發行しつゝありしものは、彼の貴顕學會の稱ある東京地學協會に譲りし、爾來世間讀者の眼に遠さからんとするの觀あり云々^{（24）}」と奇怪な文章をのせているが、横山教授は今も地學協會の地學雜誌に熱心に提携しているから、ここに地質學教室關係の人というのは單人稱であろうと暗に小藤教授をさし、地學雜誌は部數が増加したから世間讀者の眼から遠ざかつてはいないという。

（24）この一文はわざわざ地質學雜誌のうら表紙に三號から數か月にわたって転載されていたのも、兩者の對立感情を示すものであらう。

第二期の編集態度 地学協会発行になってからの地学雑誌は合同直後の第五集はとにかく、第六―九集（明二七―

三〇）の論説はほとんど地質調査所の報文で、それも数号連載のものでうめられはじめたことが特徴である。

生野探鉱地の地勢と地質

巨智部忠承 六集三―九月（七回）

豊筑煤田地質調査報文

鈴木 敏 六集三―十二月、七集二―七月（一四回）

土壤の吸肥力と土壤の理化学的性質との関係

東条平二郎 六集三―十二月、七集一―一月（一六回）

本邦殖産の原料（燐肥の供給如何）

恒藤規隆 八集一二月、九集一―十二月（計一〇回）

本邦石油産地調査報文

中島謙造 八集六―十二月、九集一―十二月、一〇集一・二月

院内鉱山

山下伝吉 九集一―六月（六回）

このほか二―三回連続のものも多数あり「地質要報」からの転載もあるが、すべて筆者は地質調査所の技師で第九集の数号の論説はこれらの続稿だけということもある。もはや学界研究雑誌、啓蒙教育雑誌のいずれでもなく、無味乾燥な官庁的報文の複製でしかない。

私の不思議に思うことは、このような編集に対して、なぜ旧地学協会の役員たちがその本来の創立精神を主張しなかったかということである。「合併当時、並にその後に至っても、旧地学協会員の予らに暮々言はれたことがある。それは協会は学術研究（石田注、こゝでは自然―地質学の研究をさす）の一本槍で行く処ではなく、政治・経済・工業・商業等に関する事（石田注、こゝでは世界情勢という位の意味か）をも研究する所であるから、それは充分承知してゐて貰ひたいといふことであつた⁽²⁶⁾」。協会は創立以来十五年余もたっているから、世の中の事情も変っているが、

各界の上流「指導者層」が集まって各方面の世界情報を入手しあるいは援助するイギリス王立地理学協会を範とした精神は、もはや稀薄になってしまったのであろうか。それとも元来、日本ではそういう階層や精神が存在成長しないのであるか。

(25) 前稿、協会幹事渡辺洪基の各年会の報告など参照。

(26) 横山又次郎、地学雑誌の今昔（地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五、一〇）

当時の地学協会の役員は北白川宮（台湾において薨去後は閑院宮）会長は別として、副会長は榎本武揚子爵と鍋島直大侯爵、幹事に花房義質男爵、曾我祐準子爵、赤松則良男爵、渡辺洪基、和田維四郎の五人、評議員には以上のほかに蜂須賀茂韶、長岡護美、佐野常民、松平信正、松浦詮、小沢武雄、伊藤雋吉、福島安正、大島圭介らの華族・軍人・外交官、学問の人としては和田維四郎、横山又次郎、坪井正五郎、荒井郁之助などである。このうち和田・横山の二人は明二六合同同時に旧地学会から入って役員になり、その後だんだん地質学者がふえてきて、明三〇までには巨智部忠承、鈴木敏、神保小虎が入っており、それだけ華族議員がへったのである。

しかし実際に花房男爵が「協会を牛耳っていた」（横山又次郎）としても、長岡子爵などとともにすでに明治二十年代末には政府の高官を歴任しており、協会の実務的内容的事柄にはふれず、協会育ての親であった渡辺洪基も幹事に名を連ねているが、外交官・行政官あるいは政治家として活動の場をもっていて協会に対して往年の熱情はなかったであろう。しかもこれらの人々には歴史の長さ、宮様を会長に奉戴する⁽²⁷⁾ための慎重さ、減少する資金に対する配慮等々だけが重くのしかかり、「青年若輩の設けてゐた地学会」の旧会員に対して、心を開いて協会のあり方を討議す

るという状況ではなかったのではなからうか。これは全くの推測であるが、地学雑誌の編集内容をみて、殷様方と地質学者達とが両すくみのような格好にあったのではないかと思われる。

(27) 明治時代、宮様を会長（総裁）に頂いているということは、協会の運営責任者たちにどのような心理的作用を与えたかは、おそらく今人の計り知ることが出来ぬ位であろう。昭和十年代でも、編集委員の末席にいて何かを申出しても、「宮様を頂いている本会としては云々」という長老先生方の言葉は度々聞いた。ただ歴史が長いというだけでも、とかく保守退嬰、旧套墨守に陥るのに、さらにもう一つカセがあったわけである。

両会の合同とはいふものの、地学会の一半の中心人物たちは地学雑誌は地学協会に渡すが、自分たちが乗りこんで行って協会の豊富な資金を利用して、調査もし雑誌も盛大にしたいという希望だった。それで「頭と口と筆で活動するから会費を免除してほしい」と二九名中、一二名は免費会員になったりした。しかし「旧地学協会の役員達も亦免めて（議員会に）出席された、これは旧地学会員の行動を監視する為であると思はれた」ように、財布の紐はなかなか堅くこの点からも「研究や探検が幾分か容易に行はれると楽しんでた」予想がはずれた。

(28) 鈴木敏、地学協会と地学倶楽部（地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五、一〇）、横山又次郎、前掲

そのためにこのような官庁報文転載の安易な編集をしたとは思いたくないが、創刊当時のように地学とは何かという問題意識は地質調査の遂行に、雑誌刊行の労苦は協会丸抱えの発行にそれぞれ置きかえられて、編集を担当している地質調査所は日清戦争で多忙を極めて余力がなかったことから、手元にある報文類の転載で間にあわせたのである。もう一つ致命的なことは、当時の調査所の技師たちは地質調査以外に関心の中が狭かったことであろう。ナウマ

ン・原田を継承して岩石・古生物を論じて日本・東亜の地質構造や成因を研究するには現業官庁として余裕はなく、個々の鉱山鉱床を調査分析しても日本の資源問題として論ずるには、まだ調査が行き届かず、また社会の科学的関心も今日と異なり低かった。全般的なものとしては、鉱山局長兼地質調査所長を罷めたばかりの和田維四郎の「本邦石炭の供給は如何」(五集十二月、六集一月・二月)があるだけである。それに続いて地学協会でした「東洋に於ける製鉄事業」の講演(明二七・一・二三)は右と関係の深いものであるが、協会報告(一五―三)に載せられて地学雑誌には載せられなかった。ここらあたりに編集技術の拙さ、また当時の地質技師の視野の狭さがみえる。

論説の官庁報文的長稿のほか講義講座的のものとしては

地学通論(雑録) 岐陽学士(山上万次郎) 地学会時代の四集十二月に一回のり、そのあと五集五月号より七集七月号まで一

九回

地質原論(雑録) 横山又次郎 五集一月より七集十二月まで、一八回

冒頭に地質学の関連学科として鉱物学・化学・古生物学・物理学・天文学とともに地理学をあげ、次のように記している。「地の理は地中の構造の地上に於る働力作用の結果なれば、地理学と此学(地質学)との関係は密に過ぎ其間殆ど判然たる區別を立つべからざるなり。」

横山は小藤とちがい、とくに地理学に意見をもっていたわけではないが(晩年は少しちがうこと前述の通り)、ここでののは自然地理の一部をさしているであろう。

気象叢談

肝付兼行 六集十二月より七集十二月まで一三回(これは水交社記事の転載)

そのほか八集から「商業地理門」と「地災集覧」という欄が巻末に設けられた。前者は奈佐忠行の「本邦の港」であ

るが一号に二―四ページ位ずつ港を一つ一つあげ、港市の事情を述べ出入貨物の品名と数量・金額、仕出地・仕向地を表示したもので（八集二月号から一〇集九月号まで二三回）ダラダラ続きの標本みたいなもの、後者は明一九、農商務省地質局において白野夏雲（明二九現在、札幌神社宮司）が蒐集調査した日本の地学上の災害（地震・火山）を諸古記録より年代記的に抜粋整理したものを、毎号数ページずつ分載したもの（八集十二月号より一四集四月号にいたる四〇回で中断）。地質調査所に保存する写本で、出版物の刊行が今日ほど容易でなかった時代であるから、こういう形で残すのも一つの方法であろうが、内容は中国の伝統を強く引いた明治前期の臭があり、近代科学で裏付けされていないのは止むを得ない。やっぱり安易についての編集といえはいる。

そのほか次のような旅行談は「東京地学協会報告」の方針であり、じっさい□印のものはその例会で話され、それにも掲載されているものである。

仏領印度支那旅行談（雑録）

英コルゾン 六集一・八・九・一〇

千島巡検記

横山壯次郎（北海道庁）六集二・三・四・五・六

種子島及屋久島探検記□

西和田久学（地学協会囑託）七集一・二・四・八月

千島巡検雑記□

石川貞治（北海道庁）七集五・六・七月

フヤリッピン群島実見録□

杉野宗太郎（―）七集九・一〇・一一・一二

いかえれば第二期は協会書記編集の例会講演録である「協会報告」と、地質調査所員編集の自然科学的「地学雑誌」を地学協会として出版していたが、末期にはその境が不分明になってきたのである。

こういう点からも地学協会が「協会報告」と「地学雑誌」とを併行して発行することの困難さ、無意味さもうかがうことができる。それに加えて協会の財政は極度に悪化してきた⁽²⁹⁾。それで明三〇・六、「東京地学協会報告」を第一八年第四号をもって廃刊し、以後、地学協会の演説・報告等は「地学雑誌」に掲げることにし第二期は終る。

(29) 「協会報告」を廃止して「地学雑誌」のみと決定した議員会(明三〇・六・二二)で、欠損三七七円余は非常臨時支出とし、「都合によっては協会所有公債証書を売却して負債を償却すること」ときめた。(九集七月号)。

第一期と第二期との地学雑誌の外観上の差は、第一期は同志的会員の編集雑誌であり、その会員達是一般購読者に対して最高の指導的立場にあったから、「会員消息」の欄には「農商務三等技師××氏は×月以来、美濃・飛驒・越中諸国の地質調査中のところ、過日帰京せられたり」とかいう類の出張記録が詳細に出ており、はては「小藤理科大

学教授は八月、展墓のため帰省されたり」などということまで出たこともあった。これが第二期、地学協会に移ると欄そのものがなくなった。協会の殿様方から文句が出たのであろう。

もう一つは第二期になって巻頭に地図や写真の図版が毎号入るようになったことである。着色のものもあるのは資力の豊かな協会のせいである。第一期の地学会発行の時代は貧乏世帯で、とてもそういう余裕はなかった。

第二期には日清戦争があったので、旅順・威海衛や太沽付近の地図が巻頭図版にあったり、雑録に清国軍艦の表があったり、清国の風俗談、気候、村落の模様も報ぜられているが(六集―明二七)、新聞記事的叙述にすぎない。やがて、明二八には台湾、遼東半島、韓国へ調査のため会員の地質学者が出かけ、そして八集(明二九)、九集(明三〇)には台湾報(横山壮次郎)、朝鮮通信(西和田久学)のほか例会の講演に朝鮮国の富源(西和田久学)、台湾の鉞

山（横山壮次郎）、朝鮮・満州の占領地見聞談（小村寿太郎）、台湾島生蕃地西蕃の探検（陸軍中尉長野義虎）などがあるが、地学雑誌の論説の方はまた地質要報、震災予防調査会報告などの論文の転載がはじまった。あるいは執筆陣である地質調査所の技師たちが戦中戦後の要務で忙殺されていたからかもしれない。この第二期の雑報・応問・書評等の執筆者ははじめは猪間収三郎（書記）、つぎに山上万次郎（地質調査所）、やがて神保小虎（明二七・一〇シベリア經由、ヨーロッパより帰国、帝国大学に移る）であった。

また協会は明二七―二九にかけて朝鮮全図、台湾諸島地図（二種）を発行し台湾諸島誌（理科大学生、小川琢治著、三七九ページ）を出版するなど、時局に関連して社会の要望に応えた。

第二期の地理学関係論文 第二期の明二六、一―三〇、六の期間の地学雑誌の論文のなかから純粋に地質学関係のものを除いて、地理学に関係ある論稿をあげれば次の通りである。大体、協会の編集の気風は右にみる通り、ある意味では投げやりであり、かつまた地理学そのものが教育面以外に独立していない時代であるからあまり重要なものはない。

地理学の分科

金田檐太郎（第一高等中学校講師？）五集一月

Ratzel, Anthropogeographie（人事地理学）にふれながら、天然地理（a、地球星学、b、自然地理）、人事地理（a、国家地理、b、国民地理または人類地理学）と分け、その細分を示す。

経済地理学に就て

金田檐太郎（〃）五集二・三月

英国印度間兵站路（兵要地理学問題）

金田檐太郎（〃）五集四・六・八月

日本海岸地理研究に就て（雑録）

高岳親王羅越国墳墓考

地理学修業の一新案

土壌と農業との関係一斑

北極地方を横切る方法如何

北海道札幌市街の開発に就て地学上の考察

日本交通一斑

土質と流行病

本邦石炭の供給如何

* 前述。各炭田ごとに地質鉱床的記述のほか、に経済的經營的見地から説く。

普通教育に於ける鉱物学科を論ず

* 博物学科の一つとして鉱物学（金石学）のみ教えるが、岩石の種類・性質・地殻の構造変動等の地質学を教えるべきである、ドイツ学制中の課程を示す。

人事地理考——人事地理学と史学の關係を論じ其の分科に及ぶ 金田棹太郎（一高？）七集一〇・一十一月、八集二月

* 天然地理は博物学の一科、人事地理は人類の性質動作に関し a、人文地理 b、沿革地理に分れ、bは歴史学と關係する云々。人間も生物の一種としてみるべしとして、人事に關係ある地理的諸要素（湖沼・海洋、山川原野、距離、島嶼、半島、海岸、溪谷、氣候）をあげ、山川原野と人間交通との關係、人種の頒布と地理の關係、島嶼と人間との關係、半島と人間交通の關係を論ずる。概説的な人類と自然的要素との話である。

金田棹太郎（〃）五集四月

北沢正誠（東京市区長）五集五月

独ミユラー、神保訳 五集五月

恒藤規隆（地質調査所）五集七・八月

ナンセン、横山訳 五集七・八・九月

石川貞治（北海道庁）五集九月

金田棹太郎（第一高等中学）五集九・一二月、六集二・七・一〇月

東条平二郎（地質調査所）五集九月

和田維四郎（前鉱山局長）五集一二、六集一・二月

脇水鉄五郎（高師講師）六集一〇月

日本鉄道交通論

金田檣太郎 八集一月

* 官設および私設鉄道工事始末、日本鉄道交通の現況、万国鉄道交通一班、官有私有鉄道の利害、日本鉄道の将来案等の諸項について。概して一般的な交通論であつて、日本のどこの鉄道ということについては全然ふれていない。当時、一國全体の鉄道の状況を説くことが、地理の教科書や講義などで要求されていたことを示すものであろう。

経済地理学一班 (三)

金田檣太郎 八集六月

* さきに気圏について述べたので、水圏について。天然地理学は経済地理学の基礎であること。一般論および外国のこと、日本のことが全然ない。地質学はもっぱら日本の地質を論じているのよりみると一歩おくられている感じである。

魯領スベリア産馴鹿を我千島に移殖するの必要を論ず

阿部敬介(米、沿岸測量) 九集二月

素人の地理学

神保小虎(理科大学) 九集二月

* 「管内地理」(小学校で自分の府県の地理を当時かく呼んだ)は多く地理に非ず。専門に非ざる一種の掻き寄せ物である。中学校の教官会議で時間数の少ない者、物知り顔の者、他に使い方のない者に「地理でも教えませんか」という。地理学は「何処に何ありや、又何故に然るやの間に答うべき者にして事実の列記に非ずして、原因結果の関係を主眼と」しなければならぬとして、管内地誌の教科書について述べる。地勢総論の区劃は天然を先として、行政人為の郡村に重点をおくべきでない。山の記事で「崎嶇として犬の牙の如し」の如きは漢文の練習にすぎぬ。「地図を見よ」の一語ですむような長文の代りに、「地図に言われぬ事柄」を書くべきである。氣候の統計、生物の種類等暗記に望することは不可。「常に忘るべからざるは原因結果の關係」で「人類のことに就ては謂ゆる人情風俗、名所旧蹟、都府市邑の如き旧幕府時代の類別を排して、天産物の利用、交通、都府、交易、住民の特性、歴史上の沿革等を連絡ある様に記すべき」である。「教科書の始に勸語を入れたるは少しく場所違ひの感あり」等々、今日では当然と思われるが当時の小学校の管内地理と称するものを批評して余すところがない。

しかし夫子自身は「北海道の地質調査を終え、今回は地理学を修めてきた」(六集一〇月号、明二七)とヨーロッパ留学から帰国したが、大学で菊地安が死亡したので鉱物学を担当し、地理学の方は批評家に止まった。なお著者は雑誌「太陽」に「昼水練の地文学」の一文を投じて、地文科検定試験受験者が本の上だけの知識で、実際には何も知らないことを指摘して、教師・教育内容の不備を説いている。

統計数字をあげてその多寡を述べても地理学ではないという議論は、古くから誌上に大学出の人によって説かれているが、それではどうしたらよいかといっても別に名案もなく、せいぜい地球上における人類と自然という観点から概説的議論をする位であって、地域的研究論文という種のはまだあらわれない。

五 一本立の地学雑誌

協会主導権の移転 明三〇・六・二二の議員会で「東京地学協会報告」を第一八年第四号(明三〇・一―三月)をもって廃刊することを議決し、以後、協会の定期刊行物は「地学雑誌」だけとし報告、演説等は一切それに掲げることとなった。前月はじめに上野精養軒で協会の第十八年会が開かれているが、そういう気配は誌上にはみえない。ただ前章にもあげたように地学雑誌吸収後の四年間に、協会の財政状態が悪化してきたことと、一つの地学雑誌さえ官庁の報文の転載で紙数をうめているのに、その上に『協会報告』を加えて二つの定期刊行物を出す能力がないことは覆うべくもない。

(30) 二つの刊行物、とくに地学雑誌の刊行費が多額なこと、朝鮮・北支那三省・台湾等の地図類の刊行、台湾諸島誌(小川琢治著)、北氷洋洲及アラスカ沿海見聞録(阿部敬介著)などの図書の刊行等の支出がふえ、それに対して年挽金(会費収入)

『地学雑誌』——創刊(明治二十二年)より関東大震災まで

は合併前の六割になったのは、会員は閉鎖的で入会を制限しているので年間二名内外ふえ、退会・死亡がそれを上廻り、旧地学会員は大挙して免费会員となったからである。かくして明治十三年以来、特別会計として虎の子のごとく積立ててきた、保続資金にも手をつけざるを得ないことになった。地質調査所の会員が地学協会を食いあらしたと陰げ口をきく者もある所以である。

しかし財政的にはともあれ、「研究費」という項目も支出のなかにみられるようになり、種々の調査を出張者に依頼し学術的出版もするようになって、はつきりはしないが「地学」という分野の半学術的団体が確立したことは喜ばねばならない。ただし、頭部の精神や協会の体質では貴族的、胴体部の編集および読者層は平民・学究的という奇妙な形が出来あがる。それを単的に示すものは、明三二・四・一五に行った臨時役員選挙の結果である。評議員二〇名のうち半数は再選され（榎本武揚・鍋島直大・花房義質・赤松則良の華族会員と渡辺洪基・和田維四郎・巨智部忠承・横山又次郎・神保小虎・坪井正五郎の古くからの学者官吏組）従前までの曾我祐準・小沢武雄・松浦詮・長岡護美・伊藤雋吉の華族会員、大鳥圭介・福島安正・荒井郁之助・北沢正誠・鈴木敏の軍人・官吏らに代って、一〇人が新任した。それは小川琢治・田中阿歌麿・山上万次郎・佐藤伝蔵・佐川栄治郎・脇水鉄五郎・奈佐忠行・井上禧之助・中島謙造・大塚専一であって、田中（湖沼学、華族女学校教授）を除いて、あとは全部、帝国大学出の地質学者であり、奈佐（高商教授）と田中以外は全部、地質の現業機関にいる。すなわちこの時を以て、東京地学協会は完全に地質調査所に主導権がうつり、昭和敗戦時にいたるのである。

この創立二十周年大会の一月前に行われた臨時選挙は、発言権を増大した地質学者たちの発意か、それともこれ

に引きつづいて起る協会を社団法人とする動きのために、文部省あたりの勧めによるものかわからないが、協会は翌明三三・一一・二一文部省より地学の奨励を目的とする公益学術法人として認可せられた。これによって役員はまた多少変り、閑院宮会長（北白川宮前会長は明二八、台湾の軍旅において薨去）を総裁とし、榎本武揚を会長、花房義質・渡辺洪基を副会長とし、鍋島直大・桂太郎・赤松則良・曾我祐準・大島圭介・長岡護美・井上馨を名誉評議員とし、評議員は一六名となった。そして今までの幹事制度（渡辺洪基・和田維四郎・巨智部忠承・花房義質・赤松則良）に代って、新たに主幹（神保小虎、田中阿歌麿、小川琢治）をおき、実質的に協会の運営、雑誌の編集を掌理することとなった。

明三〇からはじまる第三・四期は、性格において昭和戦前まで続くといってもよいが、一応大一二の関東大震災までを一区切りとしよう。一口にいえば地質調査所の会員による雑誌の編集、年月のたつにしたがって凋落する創立時代の華族会員の発言、しかし定着した貴族風ないし官僚風の運営。この四半世紀あまりの期間は二人の人物によって特徴づけられる。前半の第三期は小川琢治、後半の第四期は井上禧之助である。この二人は地学協会創立当時の渡辺洪基と同じく協会の事業を推進し進路を左右した人物である。よって協会の性格は同じ型ではあるが、その運営なり重点なりに差が出来るので、前半を第三期、後半を第四期というのである。

小川琢治時代の地学雑誌

小川琢治が地学協会に入会したのは明三〇・三であり、ただちに編集担当を委託された。⁽³¹⁾

しかし小川と協会との関係は明二六入学と同時に読者の質疑に応問などを書いたりしただけでなく、三年生のとき協会の依頼を受けた神保小虎の命により、諸書渉獵の末『台湾諸島誌』を書きあげたりしたから、他の同期の学生より

は関係が深かったわけであるが、卒業後半年して明三〇・一、山上万次郎の退官の後を襲い地質調査所に就職したので、地学協会のスタッフになる縁ができたのである。当時、地質調査所は巨智部忠承所長の下に、地質学者は中島謙造、鈴木敏、大塚専一、山下伝吉の四技師がいたが、地学雑誌の誌上でみるかぎりこの五人は根からの地質学者で、岩石・地質・鉱床以外には何も書かず、書評・雑録・雑報と巾広い対象をこなし得るのは、調査所では小川一人であり、しかも数年後、一年余のヨーロッパ滞在⁽³²⁾を終えて、本職の地質調査より地理学に対して視野を弘め感覚を養ってきたので、縦横に筆をふるうことになる。

(31) これは編集の事務的手伝い程度であつたらしい。それまで編集は調査所の鈴木と山上が担当していた(小川、地学雑誌五〇〇号記念号、昭五・一〇)。その山上の後任として調査所に入ったから自然、編集担当ということになったのであろう。一、二年は雑録(抄訳)・雑報(世界各地の小記事)・書評を書く位であつた。地学会時代の「地学雑誌」には地質学科の学生は雑録・雑報・書評等を書くのが普通であつたが、地学会消滅を不満として小藤文次郎の「地質学雑誌」が創刊されてからは、学生はその方の編集・執筆に従い、「地学雑誌」に書くのは例外であつた。小川は北海道庁時代から地学協会に縁の深かつた神保小虎(理科大学助教授)との関係で地学雑誌に執筆もし台湾諸島誌にも着手したのである。

(32) 明三三にパリで万国博覧会が開かれるにあたり、地質調査所から百万分一日本地質全図を出すことになったとき、小川は巨智部所長に提案して中央日本の地質断面図を作成した。それらをパリに送るとき、調査所でフランス語を解するのは小川一人であつたので、陳列員かつ審査員として渡欧することになった。ヨーロッパでは万国地質学会議に日本より出席の巨智部・鈴木、ボン留学中の山崎直方らとともに出席したり、Geike, Richthofen, Nauman, Wagner, Stess, Penckなどをたずねたりして明三四・五帰国した。(小川、一地理学者之生涯)

地学雑誌が協会にうつつた明二十年代後半から地質学以外のことを書いたのは、山上万次郎、神保小虎の二人であ

り、後には小川と田中阿歌麿の二人であった。田中の椿山学人⁽³³⁾、小川の零丁学士⁽³⁴⁾のペンネームは明治三十年代から大正にかけて、もともと屢々誌上にあらわれた。とくに小川は早くから地質・鉱物と人文・社会の問題について両刀を使うことができた。たとえば、明三一、五月号に「近江産長石及雲母に就いて」(四ページ)、「絶東に於ける膠州湾」(三ページ)のごとく、雑録・雑報の執筆提供者としては地学雑誌の編集にはうってつけであった。

(33) 田中阿歌麿は明二九、ヨーロッパより帰国、明三二ごろより雑録雑報の類を寄稿しはじめ、明三二の臨時役員選挙で評議員、明三三法人化してからは主幹となり(三年間)、大一一まで実に二十三年にわたって編集委員の座にいた。小川のほとんど二倍の長さであるが、多数の寄稿にもかかわらず誌上に田中色がほとんど出ないのは人柄もあり(田中、東京地学協会との関係、地学雑誌五〇〇号記念号、昭五)、また潮沼学が中心であったこと、地質学科の出身でなく地質調査所とは無縁であったためであろう。

(34) 小川は前述のごとく学生時代から地学協会と関係があり、卒業後、調査所に就職したので田中と異なり、わがもの顔に活躍できたのである。地学雑誌の編集を中心に小川の年譜を示せば、

明三〇・三 入会、鈴木敏の下に編集担当を囑託せられる。

明三一 編集委員、鈴木・横山・小川

明三二・四 (臨時役員選挙により評議員となる)

明三三・一 一 社団法人となり、神保・田中・小川主幹となる。このとき小川は在欧中。翌五月帰国。(この主幹のメンバーは明三八・五交代を申出すまで連続。明記なきも主幹は編集を担当した。)

明三六・一 新たに編集委員をおき、小川・田中・伊木常誠・金原信泰就任(小川・田中は主幹を兼ねる。)

明三八・五 交代して主幹を退く。編集委員は小川・田中・佐藤伝蔵

明四〇・五 編集委員に脇水鉄五郎を加える。小川は一年間、脇水・白鳥庫吉とともに再び主幹になる。

『地学雑誌』——創刊(明治二十二年)より関東大震災まで

明四一・五 編纂委員は田中・佐藤・脇水となる。小川は地質調査所技師より京都帝国大学教授に転ずることになったので、十二年目に編集より離れる。

小川琢治ひとりの力ないし影響とはいえないかもしれないが、この小川時代十一年間の特徴は一口にいつて地学協会、地学雑誌の地理学への指向であった。次のごとくしばしば地学雑誌の性格を論じ、地学協会の立場を内外に向って説いた。

地学雑誌第十一集の発刊に就て（明三二・一一二二一号巻頭）

創刊以来約十年を経たので回顧したもので、無署名であるが多分、神保か小川の執筆であろう。「我地学雑誌は……初めより本邦地学の木鐸たるを期せるものにして、外より之を觀れば其初め地質専門の學者の手に成りしも、中ごろより地理學者社会に入れるが如きも、其實本誌編纂の任に幹れるものは小藤鈴木両氏を初めとし、横山氏入り山上氏入り以て今日に抵る。其前後固より些の差異あるなし……」

「地学雑誌の成せる所の事業に就て之を通觀せんか、其初や本邦の地理学・地質学を主とせるは争ふ可らざる所にして、東京地学協会之を發刊するに及び、其載する所の事項漸く範圍を弘め、……世界的態度を執り來れるは……十年來時勢の変遷實に之を促せる力甚だ大なり」

東京地学協会創立第二十年を祝す（明三二・五——二二五号巻頭）

創立以来の事業を回顧し列挙したもので、べつに協会の新たな抱負を述べているわけではない。無署名。筆者は小川か、あるいは神保小虎かもしれない。

これに続いて同二十年大会（明三二・五・一四）における閑院会長官の令旨に対する榎本副会長の奉答は次のごとく

であつて、従来の内容のアヤフヤな「地学」に代つて「地理学」を協会の当面の対象としている。おそらく小川琢治の案文であらう。

「……本会は専心、地理学の研究を計り大に其面目を新にせるものありと雖とも、翻て方今世界に於ける斯学の趨勢を察すれば、水陸到る所として探検の声を聞かざるは全く各国後れんことを恐る、是れ地理学有為の際、学者たるもの進取攻究して苟も忽にすべからざるの秋なり、而して本会は実に我国に於ける之が指導者たり……」⁽³⁵⁾

(35) これは従来のもので、そして昭和敗戦までの「……殿下台臨、親シク優渥ナル令旨ヲ賜フ、××(会長の名)等感激ノ至ニ堪ヘス……××等斯学ノ為ニ奮励努力シテ国家ノ進運ニ資シ以テ盛旨ニ違ハサランコトヲ期ス」という慣用的修辭をのみ連ねたのにくらべ、昔の渡辺洪基時代のものと同じく個性的であり心中を吐露したものである。

百万分一亜細亜東部地図を輯製するの議(明三三・一——三三三号巻頭論説、無署名)

日清役後、政治上經濟上、清国韓国と關係が密になつたのに、地理上の知識として地図・地誌の信すべきものがない。日清後に陸地測量部で韓国の全部と清国の東北地方の一部に百万分一地図を編製したが、清韓全版図について「この尺度(百万分一)の地図を造らば、支那内地の鉱産を開き鉄道を敷き新市場を興さんとするものの需要を充すは目下の急に應ずる最良方便ならん。清国の開放を唱え清国の啓発を叫ぶもの、吾人屢之を耳にするも、清国内地の形勢を知るに最も先づ要すべき正確なる地図を造り、并に之を説明すべき地誌を編することには未だ注意せるものあるを聞かず、……我東京地学協会二十年來の目的は一般地学の進学を図るに在りと雖も、重きを東亞諸国の地理に置き、特に力を其探検に用ひ報告并に雜誌に載する所……」云々。

執筆者は多分、小川琢治であらうと思われる。前年、万国地理学会議で国際百万分一地図の編製を決議したのに対し、協会がアジア東部地図としてこれに着手せんことを論じたもの。国際學術協調の論潮とともに、日本の大陸發展への国家主義的視野

もなくもないのは、日清役後の時勢としては止むを得ないことか。

地学雑誌の第十六年発刊に就て（明三七・一——一八一号巻頭、小川琢治）

十六年という特別の区切りでもない時期だか、この五年間の世界における重要事件として、南アフリカ・アラスカ・ベネズエラ・バナマ・北清拳匪の諸問題、それにシベリア鉄道、清国の鉄道・鉱山・埠頭の開発、両極探検等を顧み、「我国に科学的探検の興らんことを切望する」云々。

これはイギリスの Royal Geographical Society を範として、脳中において書いたものであろう。この前後から、外国旅行談探検談がまことに多く講演されまた掲載されるようになり、地学雑誌の体質を作り出した。

地学雑誌第二〇〇号発刊の辞（明三八・八——二〇〇号巻頭、小川琢治）

引きつづいて二〇〇号という機会をとらえて再び「科学的知識中の最も世界的なる一部門、地理学の思想の普及を措て最も先んずべきものを見ざるなり」云々。

いかに編集委員を歴任し、毎号縦横に筆をとるといえ、地質学でかたまってゐるなかで、こうはつきり地理学を宣言高揚するには、相当の勇氣が必要であり使命觀をもっていたのであろう。しかしこれは結局、小川琢治その人だけの主張であつたらしく、明四一、京都大学へ転任したあとはこういう氣風は雲散霧消してしまつた。

編集を十年余も担当しておれば、その色彩が誌上にあらわれるのは当然だが、このように機会あるごとに小川琢治の主張が表明されることには、公的な機関誌としては問題があつたかもしれない。しかし当時、これに対して協会内
部、とくに地質調査所会員からも反発もなかつたようだし、また小川の去つた後、協会創立三十周年（明四二）にも

地学雑誌第三〇〇号（大二・一二）にも、また雑誌創刊第三十年（大七）にも何らの発言もないことを思いあわせると、次の井上時代の地学協会のあり方が、いかに惰性的⁽³⁶⁾であつたかを証することになるかもしれない。

(36) 「惰性的」というのは言い過ぎかもしれない。後述するように井上時代も講演のなかに旅行視察談が多く、かつ極めて広汎な分野から講演者が選ばれ、社会事情の説明聴取を心がけていることをみると、明治三十年以前の「地学」とは全く異つた「地理的なもの」を地学協会の目標においていたともいえ、小川時代の延長ともいえる。ただ小川技師のごとく筆をとつて協会の進路を明示し、位置づける人はついに地質調査所にはもちろん、その他の編集委員のなかからも出なかつた。

井上禧之助時代の地学協会

井上禧之助は小川琢治と大学は同級であるが、学生時代には地学雑誌には関係はなかつた。明三〇、小川より少しおくれで入会。台湾総督府時代、福建省閩江旅行所見を講演（明三一・一〇・二五、一〇

集一一・一二月号）しているだけで、東京へ帰り地質調査所へ入り明三二・四協会の法人化前の役員大量交替の臨時選挙で評議員となつてからも、別に活躍せず、第二二年総会（明三四・五）に横浜の海底地質の講演（二三集八月号、官報より転載）と例会に台湾分水嶺横断記を講演（一四集七・八月号）しているだけで、協会とは縁は深くなかつた。

しかし小川の京都帝大転任とともに主幹となり、大正十四年春まで十七年の長きにわたつた。小川琢治の主幹・編集委員歴任十一年、地学雑誌に偉大な足跡を残したのとちがい、井上は同時に地質調査所々長でもあつたので実質的に協会運営の衝にあつた。⁽³⁸⁾

(37) 井上の地学雑誌における論説・雑録の寄稿はむしろ明治末からで、日本のみならず朝鮮・満洲・中国・世界について鉄鉱と石炭の賦存の状況、需給関係を論じたものである。地質調査所の業務としてまとめた官庁報文の転載もある。職責上からも国家主義的思想もあつたが、後年昭和戦前、第二次大戦の初期、ヨーロッパの鉄鉱床を講演したが、真正のゲオポリティクと

して私には感銘が深かったことを覚えてゐる。

(38) 井上時代の役員をみると、榎本武揚会長は主幹就任の年(明四一)の秋に死亡、翌年五月から大一〇まで鍋島直大侯爵が就任、ついで徳川頼倫侯爵、副会長は花房義賀子爵と菊池大麓男爵。大六に両副会長が相ついで死亡すると大森房吉・堀内三郎が代る。相棒の主幹は明四一が脇水(東京帝大農科大学)と大森(同理科大学)、明四二から福地信世(古河鋳業)と大森。多くは員に具っているだけか、福地のように後輩。ただ創立会員の副会長花房子爵だけは頭が上らなかったというか、協会に対する熱意と意見には、つねに敬意を表していたようである(井上、故副会長花房子爵、五〇〇号記念号、昭五)

それで井上の功績は地学雑誌の編集上よりは、むしろ協会の事業にみる事ができる。最大の事業、中国地学調査については後述。地学雑誌は明四一―四五、田中阿歌麿・佐藤伝蔵・脇水鉄五郎、明四五―大六、田中・佐藤(東京高師)、大六―一二、佐藤(主任)・田中・西村万寿(東京女高師)・小林儀一郎(地質調査所)が編集委員であり、みな井上の意向のままに動き、とくに強い個性の持ち主ではないし、主幹もこのように同じ人が続けていては、いかにも新味が欠け誌面が停滞状況にならざるを得ない。

小川時代にはほとんど見られなかった地質調査所の報文転載がまたはじまる。すなわち、二〇集(明四一)には論説で講演筆記一〇篇(一五号分)に対して転載一篇(震災予防調査会報告)であったのが、小川が居なくなると二二集(明四二)では論説一七篇中、講演九篇(一五号分)、転載五篇(一二号分)、二二集(明四三)では二二篇中、講演七(一七号分)、転載八(一一号分)、二三集(明四四)は二二篇中、講演一二(二三号分)、転載七(二四号分)という調子になる。手近の官庁報文の転載で間にあわせるのは、編集低調時に起る地学協会の病である。⁽³⁹⁾ 書評欄もほとんど地質調査所の出版物の簡単な紹介にかぎられる。

(39) 転載論説の多いのは編集能力の不足によることは論のないところであるが、あなたがち安易な怠慢とのみ言いきれない。定期刊行の第三種郵便物の規定をやかましく言う時代もあり、止むを得ず応急のしのぎとして行われたこともあるという。(木下亀城、昭和初め頃の地学協会、地学雑誌、一九六九、六、東京地学協会九〇年史号)

第三・四期の地理学関係論文 第三期は小川琢治の地理学高揚時代でもあったが、地理学の論文としてとくにあげべきものは多くないのは、一に地理学研究そのものの未発達、研究者の不足によるものである。第四期の井上時代になると地学に逆もどりするが、高等専門学校に地理学教授がふえてきて、論説よりは雑誌に当時の地理学の関心事項を垣間見ることができる。

地質時代と石器時代との関係を論ず

佐藤伝蔵 一〇集一〇九(明三一・一)

地文学と地質学と地質学の関係を論ず

岩崎重三 一〇集一一三(明三一・五)

Erdkunde を Geographie と Geologie とに分け、前者をならぬ Mathematical, Physical, Political に分けその前二者を地文学 (natural geogr.) 後者を地理学とする。世間では政治地理学なる訳語に拘泥し一国の政治を述べるものとして、憲法・輸出入・軍備などを並べるが、地理学というものが Political Geogr. で地理学の外に、政治地理学はない云々。人類の住所として地球表面を記載するものが地理学、人類に関係なく今日の地球表面を記載するものが地文学、地球の歴史を知らんが為に今日の地球を研究するものが地質学である。発達の歴史の目的以外に今日の地理を記載し研究するは、地質学の目的に非ず云々。同氏著「実験地文学」の論説中に詳説。小藤時代からはじまって「地学」などという言葉でモヤモヤしたものを、明瞭に割り切って現代に近づいたものである。

地理学とは何ぞや

零丁学人(小川) 一〇集一一七(明三一・九)

『地学雑誌』——創刊(明治二十二年)より関東大震災まで

おそらく前稿に刺戟されて執筆したもので（小川は書評で岩崎の実験地文学は著者の工夫新案であるが、実験の実はないといっている）、一つの系統科学たるドイツ流の地理学と支那学者の地理とは異なる。後者の禹貢は世界の地理学統計学の鼻祖ならんも、ついで出た地理誌は郡県の興廃を主とし山川の位置を論すること漠然、山海経・淮南子・地形訓のごときものの地理は荒誕無稽、列仙伝と同じ。今日の日本の地理はこれよりやや進歩しただけで、山川湖海、都府産物名を列挙、これはリッテル、リクリュー一派の地誌 *Erdbeschreibung* と地理学 *Erdkunde* を混同した非系統的地誌が、まず我邦に導入された結果である。

吾人の地理学は地球上で経験する諸現象の相互関係を研究する。气象学・海洋学・地質学・生物学・人類学・人種学の進歩は地球上の知識が進む。「これらの知識を綜合し其系統を正し、其関係を詳かにするのは地理学の職なり。」

そのもっとも密接なのは地質学で、地質学は地殻の内部を研究し（垂直的）、地殻に印せられた遺跡より過去に遡る（時間的）。これに対して地理学は地殻の外面、地表の外形を研究し（水平的）、現在の状態を主とする（空間的）。「相須ちて初めて地球の諸現象を了知するを得べきなり」として、琵琶湖の地理学的研究項目の一例をあげる。

いかにも地質学者らしい自然面だけを強調した論說で、一昔前の小藤文次郎の認識と一脈相通じている。（ヨーロッパより帰朝後になるとちがってくる。）

本邦氣候の区分に就て（寄書）

中川源三郎 一一集一二五（明三二・五）

* 温度・降水・風によって九区分し各の特色をあげる。日本でもこの方面の初期の論文であろうか。

台湾産業の現在及将来

井上甚太郎 一一集一二一（明三二・一）明三一・一一・一二二講演

統治上の台湾地理

石井八万次郎 一一集一二三（明三二・三）明三二・一・一二二講演

日本群島地質構造論

小川琢治 一一集一二六より一三二（明三二・六—一二）六六ページ

* 著者の主業績の一であり渡欧中 Stoss と話して一四集(明三五)に結論を書いている。また地質要報(明三九)、地質学雑誌(明三九)、地学雑誌(明四〇)に関連論文がある。

我日本に於ける河の地文調査の必用を論ず 岩崎重三 一二集一三七(明三三・五)

* 日本における川の調査の重要さをのべ、各部局に分けないで専任技師をあたらせるべしという、研究項目一四をあげ、次号に球磨川(一三ページ)について説く。

日本植物地理に就て 本多静六 一四集一五七より一六一(明三五・一一五)

日本の文明に及ぼせる地理上の影響 小川琢治 一四集一六五(明三五・九)

* 華族子弟に対する講演、自然的要因の重視

邦内に於ける海藻の分布を論じて日本海の成立に及ぶ 岡村金太郎 一三集(明三四・九及一二月)明三四・六・一六講演
政治地理に就て 山崎直方 一四集一六六・一六七(明三五・一〇―一一)明三五・五・一八

総会講演

今日の日本の政治地理は地誌にすぎぬ。地理学に自然地理と人文地理とあり、政治地理は後者に属する。万国の政治的現象を総括して抽象的に地理学上より説明する新しい学派が漸く数年前にできた。各国の人類が地理上、どういう政治的団体を作っているか、どういう思想に富んでいるか、その間の関係を地文学の中から見出して総括した抽象的学科である。政体、国土、国民の諸関係の諸例をあげ、「国益に関することなれば貴族の内より地理学者の出でんことを切望する云々。」

総裁宮を前にした総会の講演筆記である。「協会報告」の昔から講演筆記は多く、とくに明三〇年代以後はほとんど毎号、いろいろの講演筆記がのり、探検談・旅行談の類はまことによく速記されているが、このような抽象的な話になると、意味の通じないところ、重点のおき方の違いなどが出てくる。これはおそらく Ratzel の Politische Geographie を頭においたも

のであろうが、それが当時の帝国主義的植民地獲得時代と適当にマッチして表現されているようである。

南島島と北太平洋問題

志賀重昂 一五集一六九—一七〇(明三六・一一二)

* 著者の日本主義と米国西漸史

島の人文に於ける地位

志賀重昂 一六集一八六・一八七(明三七・六一七)

北支那の地理学的探究に就て

小川琢治 一七集一九三(明三八・一一)

高山の特色

山崎直方 一七集一九三・一九四(明三八・一一二)、明三七・一〇・二二講演

* ヨーロッパより帰国後、日本の氷河問題について一石を投じて(地質学雑誌、明三五・一〇—一十一月号)、地学協会でそれについて講演する機会をもったもの。

支那都邑の構造に就て

山崎直方 一八集二〇五(明三九・一一)明三八・一一・一八講演

* 日本の都市集落地理学の初期的研究講演

薩南海上に於ける地名研究の一節

原秀四郎 一八集二一三(明三九・九)明三九・二・一七講演

日本帝国政治地理の研究に就て

山上万次郎 一九集二一七(明四〇・一一)

政治地理学の範圍と現状。日本で政治地理の研究の進歩しない理由。なお一七集二〇三(明三八・一一)にも関説あり。小川琢治は山上著日本帝国政治地理を書評して、個々の事実はよく集められているが目録的にして、地と人、地と国家との関係に論及せず、政治誌としては有益なれども政治地理として欠くるものありという。(一九集二二一、明四〇・五)

本邦に於ける鉄鉱の供給如何

井上禧之助 二二集二五六・二五七(明四三・四—五)明四三・二・一九講演

製鉄調査会の調査によって調査の現状を述べ、需給を論じて日本の大問題とし、支那の調査も考えねばならないという。

近世西洋交通以前の支那地図に就て

小川琢治 二二集二五八・二五九・二六〇(明四三・六一八)明四三・五・

八總會講演

人類地理の研究法に就きて

野口保興 二三集二六五（明四四・三）明四四・二・一八講演

ターレス・ヘロドタスからラツツェル・ブラーシュまで

欧州地理学界の近況

山崎直方 二四集二八三・二八四（明四五・七、大一・八）明四五・二講演

イギリス（大英学芸奨励会地理学部長 Close 大佐）、ドイツ（Pencz 教授）、アメリカ（Davis 教授）の所見。植民地理学と海洋学に関する施設の完備。

地理と通信の關係

棟居喜九馬（東京通信管理局長）二四集二八四・二八六（大一・八と一〇）明四

五・六・一四講演

日本に於ける地名に就て

柳田国男 二四集二八六―二八八（大一・一〇―一二）明四五・六・一四講演

信濃国梓川の氷河遺跡

小川琢治 二六集三〇一（大三・一）

越中国西部の莊宅 Homesteads に就て

小川琢治 二六集三一（大三・一二）

* 日本における集落地理学、とくに散村集落についての最初の論文。この要点ならびに意義については拙著、砺波散村研究譜『地理学の社会化』所載参照。散村集落を研究者としてとりあげ、これを莊宅制として把握したのは、この論文を以て初めとするが、すでに地学雑誌（明三六・一〇）に「スイス高原に於ける村落及び農家の分布」（A.T.生―田中阿歌磨）の雑誌があり、スイスの Hermann Waser の Einzelhöfe と Dörfer の分布の研究を紹介しており、「この種のものが日本に知られたのは最近のことで、山崎直方の地理学通論（中学校教科書五年用か）によって紹介されたのが嚆矢である。この学科を Societätskunde 住地学といい、最近スイスで最も発達している」云々。小川の所論にはこれが胸中の一部にあったと思われる。山崎の地理学、とくに後年、一世を風靡したその地理教科書については後述するが、ヨーロッパにおける見聞、研究が盛りこま

れていることに注意しておきたい。土地の人は別として、散居については明三九、日本の中部を測量した陸地測量部の測量手の通信に「平坦陰散区は…富山平原に直結せる高岡以南において五万分一式二図面余にあり、到る処坦々たる水田に満され、人家は其間に一戸乃至二戸位ずつ星撒羅列して、各戸に雪国の事、その防備として繞らすに喬木を以てして、一見樹林を認むるものは一として家ならざるはなく、森あれば必ず家あり、家あれば必ず森あるの光景にて……」（高木菊三郎、山岳五八年三月号、一九六四）とあるが原文は測量部内の通信であるから、研究者の注意はひくべくもなかったようである。

地力・水力と民力及国力

岡 実 二七集三一三（大四・一）三・一一・一四講演

戦争の地理的意義及其の研究に就て

小川 琢治 二八集三二五（大五・一）

黄河下流平地の戦略地理的意義

小川 琢治 二八集三三〇・三三一（大五・六―七）五・五・七総会講演

* この二つは人文地理学の一学科として戦争地理学（旧来の軍事地理学をのりこえたものとして）を研究しようとしたもの。多少は欧洲における大戦が影響したのかもしれないが、卒業以来、しばしば中国へ出かけたことや中国趣味も加わっているかもしれない。

亜米利加合衆国のパナマ運河利用と其反動的活動 内田 寛一 二九集三四〇（大六・四）大六・三・一四講演
用途地域程に就て

内田 祥三 三三集三八五・三八六（大二〇・一一）大九・一一・二四講演
世界に於ける風土病の分布

宮川 米次 三三集三八八（大二〇・四）大二〇・二・二二講演
ブラッキストン線は地学上、果して其意味を為すか 八田 三郎 三三集三九六（大二〇・一二）

渦巻形地形に付て 藤原 咲平 三五集四〇九・四一〇（大二二・一一）大一一・九・二六講演

日本の高山形 辻村 太郎 三五集四一六・四一八（大二二・八と一二）

以上に摘記したのは地学雑誌の論説の中で、地理学、とくに人文地理学に関係ありと思われるものだけであって、

このほか地質学や自然諸科学の分野にわたるものが多数あるから、右掲だけをもって、地学雑誌を評価したり、地学協会の存在を論じてはならない。地学協会を牛耳っていた地質調査所の目からはむしろこれは余分なものと考えられたかもしれない部分である。次の雑誌の摘記についても同様である。

当時の地理学の関心——雑誌

第三期のはじめ一、二年は、まだ小川琢治の活躍しない時期で清国や台湾の調査談（神保小虎の遼東半島の地質、鳥居竜蔵の台湾民族、その他外交官、軍人の旅行談）、報効義会の占守島事業報告などのほか地質調査所や震災予防調査会の転載も多く新味がないが、第一一集（明三二）巻頭に前述「発刊の辞」を掲げてから、旅行談の講演筆記（論説）のほか雑誌が多彩になる。いわゆる「学的」なものとしては、地質（火山・岩石・鉱山）・湖沼（田中阿歌麿のみ）・地震（大森房吉、しばしば毎月の地震資料がのる）・考古学（坪井正五郎と佐藤伝蔵）・人種学（鳥居竜蔵）などが主なものである。外国雑誌論文の抄訳や短報はもっぱら零丁学人（小川）と椿山学人（田中）の担当で、当時の学界を想像するには、地学協会的な論説よりはより有用である。

非律賓群島略誌

小川琢治

一一集一二一—一二六（明三二・一一六）

* 著者の『台湾諸島誌』と同系統の地誌叙述の例。同じ種類のものに田中阿歌麿のマリアナ群島略誌（明三二・一二月号より三三・一二月号まで四回）がある。

湖水の温度及其分類

田中阿歌麿

一一集一二四・一二五（明三二・四—五）

* Forêt, Thoulet 二氏の説紹介。「漸く海洋学の何たるを知りしと雖も、未だ湖沼学の名さへ聞かざる者多し」という日本初出の研究分野に属するもの。この後、田中は地学協会の湖沼観測器械購入の援助を受けて、富士山麓、山中湖の湖底涌泉に就て、日本湖沼研究略報の一（一二集一四二号、明三三・一〇）を最初として、次々と多数の研究結果を発表し、つい

『地学雑誌』——創刊（明治二十二年）より関東大震災まで

に大正六年、『湖沼学上より見たる諏訪湖の研究』(上巻) 一千ページの大著を橋本福松(長野県立松本高等女学校教諭、後の古今書院主人)の観測援助によって大成して、日本の湖沼学を確立したのである。

土地に及ぼせる人類の影響 (Weickel)

椿山学人 一五集一七二(明三六・四)

ドイツ領ニューギニアの経済地誌

椿山学人 一五集一七四(明三六・六)

スイス高原に於ける村落及び農家の分布

A T (田中) 前出

人生に及ぼす地理学的影响(牧口常三郎原著、人生地理学の批評) 小川琢治 一六集一八一(明三七・一)

「其渉猟の該博、其着想の斬新、其論断の妥当、亦滔々たる操觚者流の及ぶ所に非ざるに服せり、」自然現象と人類の生活現象との關係的知識をさしているが、しかし内容は人生地理学、即ち地理学であり、Ratzel の人類地理学 Anthropog. の一分科である人文地理学 Kulturge. を地理学ということとはできない云々。

アルプ山地夏期住居と其遊牧制度 (O. Marinelli) 椿山学人 一六集一九二(明三七・一二)

日本(瀬戸地方)のバットランド 脇水鉄五郎 二二集二四四(明四二・四)

上州名物涸風 新帯国太郎 二二集二四九より二五二(明四二・九—一二)

ドイツの経済地理(地理教授資料) 椿山学人 二二集二五六より二六二(明四三・四—一〇)

* 翌年、同じくイギリスの経済地理(明四四・四—九)がある

北アメリカと歐羅巴——地理上の比較 (Pencle) (地理教授資料) 脇水鉄五郎 二二集二五七・二五八(明四三・五一—六)

近幾の地形と人文 小林房太郎(協会書記) 二五集二九一(大二・三)

地形・地質と歴史・人文とを關係づけて説いた初期的なもの

人口集中に就いて (Auerbach) 西村万寿 二五集二九五(大二・七)

地形及風景の分類 (Passarge)

D. Y. 生 (横田伝四郎、協会書記) 二六集三〇六 (大三・六)

交通線の里程階と網率

西村万寿 二六集三〇七 (大三・七)

一九二〇年に於ける世界諸国の人口推定

西村万寿 二六集三〇八 (大三・八)

本邦都市人口増加の趨勢管見

山上万次郎 二六集三一二 (大三・一二)

旧加賀藩の散居村落制について

牧野信之助 二七集三二〇 (大四・八)

* 前掲、小川の論文に対する反論。後『武家時代社会の研究』所収。前出拙著参照。散居研究の論文としては、いずれがより重要かつ本質的かは、論者により異なるであろうが、牧野のこの一文は論説でなく雑録であるのは、石川県師範学校教諭の寄稿であり、位階勲等を重んずる地学協会の観点から、あるいは歴史的文書を掲げていて、地質調査所好みでないことなどからであろうか。とまれこの二つの論文は昭和初頭まで十数年ふれられることはなかった。

人文の特質と地貌の輪廻

A. B. 生 三〇集三四九 (大七・一)

出典については何の記載もないが、同じ内容のものが、「地形と文化との関係を説明せるリッチ氏の新研究」(山崎直方、東洋学芸雑誌、二月号)にのせられている。A. B. 生はこの後も欧米雑誌論文の抄訳をのせている。

北海道の火山湖

田中館秀三 三〇集三五四より三一集三七一まで一三回 (大七・六より大八・

一一)

太平洋の礁に囲まれたる島々 (Davis)

辻村太郎 三一集三六三・四・五 (大八・三一五)

天竜川流域の地形

辻村太郎 三一集三六七より三七〇 (大八・七一・一〇)

地質学的記載をぬきにした地形の話。かくしてやがて大一二に本邦最初の『地形学』が出版される。

朝鮮に於ける高き山と高き都邑

中村新太郎 三一集三六八 (大八・八)

『地学雑誌』——創刊(明治二十二年)より関東大震災まで

気候の新分類法に就て

佐藤 伝蔵 三二集三七四（大九・一一）Köppen の紹介。

世界に於ける動力源

井上 禧之助 三二集三八四（大九・一二）

石油工業に関する今後の問題

秋元 不二男 三二集三八四（大九・一二）

六 東京地学協会の性格

地学雑誌を唯一の刊行物とするようになってからの地学協会は、いかなる性格をもって行動したか。それを示す第一は毎月の例会講演で、それには各界から講演者をえらんで、広い視野を失わないようにしたこと。これは協会の発足が社会上層階級の知的集會場であつた名残である。第二は協会の行った中国地学調査に示される国家主義と科学的関心の併存である。これは協会の運営が日本政府の一機関たる農商務省地質調査所に歸したので、日露役前後から工業化に進み大陸の資源に着目していた当時の日本の姿勢と一体不離の關係をもちつつも、一面、科学的な関心と態度を失わず探検調査の形において進んだということであらう。

地学協会の講演

前稿で地学協会の創立の趣旨について論じたように、海外の事情を直接体験した当人から聞いて、自らの目を開き世界の進運に遅れないというのが協会の目的であり、「協会報告」はそのために明治三十年まで発行されていたのだが、それが廃刊になって学術普及雑誌としての「地学雑誌」一本になつても、協会の毎月の例会の講演には、外国事情・旅行談という種のもの、地震噴火その他学問的課題報告という性格のものがあつた。それは協会的主幹や編集委員の方針や時勢によっていろいろ替つた。

講演は筆記して毎号の論説となるが、その約九割までは見聞体験した旅行談や具象的な事柄であり、かつよく筆録されているから読んでわかり易いが、内容が専門的あるいは抽象的事項になると筆記者の理解をこえたり、また講演者の談話の仕方によっては、一読明瞭でないこともある。しかしいずれにしても、日本語の口話体は冗長である。

まず、何十という講演の内から、多少、毛色の変った、各時代を特色づけるようなものの、冒頭の部分をサンプルとして抜き書きしてみればどういう気持で講演がなされたかがわかる。

「私は昨年の二月に東京を出発して、清國の湖北・河南・陝西の各省を漫遊し、六月の中旬に東京に帰りました。夫れに就き神保博士から何か地学協會に於て支那の話をする様にと云ふことでございましたが、私は素より地学の知識に乏しい者でありますから深く辞退を致しました。然るに何でも見聞した丈けの事で宜いから話をする様にと云ふことでありましたから御請けを致して支那の歴代帝都のことに就て一場の御話をする積であります。（市村瓊次郎、支那歴代の帝都に就て、明三六・一一・二八例会講演、第一六集一八一号、明三七・一）

「私は三十五年の八月に東部蒙古探検が目的の為に旅行をしました。丁度其の時に小川（琢治）理学士が北京に居られましたので、それで是非一つ話をして呉れろと云ふことでありましたが、長い間を経て居りますので、土地の地名等も忘れて居りますし、又突然の事でどう云ふ風にして御話をしやうと云ふ考案も別段に立て、参りませぬが、一般に通つた所の地形、それから蒙古人の風俗、其他氣候と云ふやうなことに付て御話をしやうと思ひます。（陸軍歩兵大尉服部賢吉、蒙古地方経歴談、明三八・一・二八講演、第一七集一九六号、明三八・四）

「私は御承知の通り満州軍総司令部に付いて参つて居りました。……旅順開城の後始末などを付け、それから北の方、即ち奉天に帰ることを命ぜられました。其時は遼陽奉天の戦の済んだ後でございまして、……奉天では昨年の八月から十二月まで居

つたので、戦争の見聞と云つた所が決して充分ではない。況してや私の専門学は他のことでありますから、一向詰らぬことしか申上げられませぬ。そこは御承知置を願います。(有賀長雄、従軍中満州所見、明三九・二・一七例会講演、第一八集二〇八号、明三九・四)

「私は昨年、主に河南陝西の地方を旅行し、前後五ヶ月を費し二月十日帰朝しました。其間に見聞しました事の大要を申上ます。私の今回旅行の目的は専門が建築学でありますから、主として支那の古代建築の遺跡を探検するに在りて、傍ら支那古代の文化の遺跡をも調べたのであります。斯様な目的で旅行したので自然御話も歴史的に傾きますから予め御承知置きを願ひたい。(関野貞、清国河南陝西旅行談、明四〇・二・二〇例会講演、第一九集二二二号、明四〇・六)

「私は動物学者でありまして地理学者でも天文学者でもありませんから、此会に出まして御話を申上げる資格は無いのであります。併し幹事の方から過般南清の方を少しばかり旅行しましたことに付て話して呉れると云ふ御依頼でありましたから、今日聊か御話を申上げやうと思ひます。固より今申した通り私は地理学者でなくして動物学者でありますから、私の調査を致しました動物、即ちテグス虫を調べるに付て歩いた道順を御話申すくらゐに止まろうと思ひます。(佐々木忠次郎、南清旅行談、明四一・一〇・一九例会講演筆記、第二〇集二四〇号、明四一・一二)

「先達て本会の井上(禧之助)君から市勢調査のことに就て此会に出て話をするやうにと御話でございました。実は地学協会という名前に対して甚だ縁の遠いやうに考へて居るから如何かと思ひましたが、此協会の目的は余程広い意味であるといふことであります。其れに私は昨年東京市に於て実行いたしました市勢調査の仕事の直接の責任を取つた者でありますので、此調査の必要を適切に感じますと同時に、又どなたに向つても機会と時間との許す限り此事について御話を申して見たいといふ希望を有つて居るといふやうな次第で、つひ今日皆様の前に立つ様なことになりましたのであります。(島田俊雄、東京市勢調査に就て、明四二・五・九講演筆記、第二一集二四九号、明四二・九)

「閣下及諸君、今晚は我國に最も名譽を博せられたる諸先生の前に於きまして、何か一場の講演を致すやうにと云ふ幹事からの御請求に対して長く躊躇して居りましたが……地学のことに就きましては全く門外漢の者が聊か暹羅の狀態に就き講演を致すには……」(暹羅駐劄、全權公使、吉田作弥、暹羅の状況一般、大三・三・一四例会講演、二六集三〇六号、大三・六)

「私は昨年蚕糸業調査の為に支那に出張を命ぜられて……今日それについて何か話をしと云ふことであります。実は私の觀察いたしましたのは蚕糸業と云ふ狭い範圍内でありまして、何も御参考になる様なことはないと思いますが、折角の御希望でございますから、暫く清聴を煩はします。」(明石弘、支那の蚕糸業、大七・二・一四例会講演、三〇集三五四号、大七・六)

「光輝ある歴史と最も有力なる知識とを集められて居ります東京地学協会の諸君に卑見を申述べる機会を得ましたのは誠に光榮とする所であります。……此問題は朝野の間に閑却されたやうな傾きがあるやうに思はるるのであります。私どもが漁師の仲間入りを致しましたから斯う云ふのではなくして……多少の御縁故のあります所の当地学協会の諸君に此問題を訴へまして、皆さんの御考慮を仰ぎますことも強ち無用なことでないと思ふのでございます。」(鶴見左右雄、水産業の現状並に其發展策、大七・四・二七総会講演、三〇集三五七号、大七・九)

これを読んで氣付くことは、すべての講演者が地学協会でするのは場違いであると感じていることである。それは地学協会すなわち地質学者の団体というイメージが作用したからで、Geographical Society そのままだに地理学協会と受取られれば、そういうこともなかったであろう。(しかしまた、地理といえば日本の学校地理の先入観から、いたずらに羅列し記述するという弊害を生じたかもしれない。)

協会の運営主体をなしていた地質学者のものである、日本国内の地質調査の話は少ないのは、地質調査所からは報文

が出るし、大学では地質学会で発表の機会があるからで、協会の講演では興味をもつ人も少なく、もっぱら火山の噴火の話にかぎられる。外国については旅行談の一種として、東アジア各地の地勢・地質・鉱床などについて地質学者の話がいくつもある。

日清役後、日露役の前後にかけては、台湾・朝鮮・満州・中国・樺太のものが多く、対象も広く、前掲の市村・有賀二氏のほか中村進午（戦時公法）、金沢庄三郎（朝鮮語）、吉田東伍（唐太と松前藩）、那珂通世（古満州）など。明治末・大正初になると建築の関野貞・伊東忠太、歴史の幣原坦・村川堅固、写真術について中村清二（写真測量）、中村精男（天然色写真）、その他農商務省、通信管理局の役人から所管事項を、公使や領事から外地事情を聴いている。第一次大戦がはじまると膠州湾、南洋の独逸領、独仏の国境問題、海上戦、中欧の民族と講和問題、海運（管船局）、戦時中の工業の発達（農商務省）、戦争がすむとバルカンの政局（長瀬鳳輔）、大戦後本邦貿易の趨勢（野間蒼雄）、米国の排日問題（ニューヨーク、ウォルド記者）などと、それぞれの時代に応じて時局的問題を各界より依頼している。

これは地学協会のお家芸でもあるが、すでに指摘したように明治十年代、二十年代とその後とは新聞雑誌の普及の状況がちがうので、海外事情の伝達の意味も異なる。限られた少数の聴衆に対する講演ではあるが、平明な話で終り、あとで熱心な質問討論がなされたようでもない。それに出席者はいつも会員一〇名前後（他に傍聴者も同数ぐらい）である。明治三十年代の常連は花房義質（副会長）、長岡護美、神保小虎、田中阿歌麿、小川琢治、山上万次郎、佐藤伝蔵、山崎直方であり、時々鍋島直大侯爵（会長）はじめなにがし伯爵くればし男爵が見える。それが四十

年代大正初めに入ると、山崎・田中のほか正木助次郎、大関久五郎、奈佐忠行、依田豊、野口保興、富士徳治郎などという地理の先生方の名が頻繁にみえる。大正中期になると地質学者もみえるが、不思議なことには地質調査所の会員の名があまりみあたらず⁽⁴⁰⁾。数か月という長い国内の地質調査に出張中なのかもしれぬが、地質学以外の講演などにあまり興味をもたれなかったのでもあろう。

(40) 毎月開かれる評議員会にも出席者は数名で、定数不足で流会することもあり、またははじめから地質調査所の会員はほとんど出ず、主幹・編集委員も欠席のことが多かったが、井上時代になると調査所のそれらの役員は出るようになったのは、地質調査所長たる井上主幹の命によるものであろう。(私の知っているのは昭和十年代の副会長としての井上先生であるが、当時の「役員たるものが毎月の評議員会に出席しないとは何事か」と叱咤されたように想像される。昭七、地学雑誌の編集書記になった青野寿郎に、従来のダラシのない雑誌の編集に対してビシリと方針を指示された小気味よい話があって、そのため青野が苦労した話がかかれてゐる(青野、地学協会九〇年史号、一九六九)。

こうしてみると地学協会の講演は、華族をはじめ社会上層部に位する会員に、各方面の時事的な情報を提供するという明治十年代の協会サロンの伝統をもったものであったわけである。しかし日本にはその種のサロンの社会的伝統がなく、華族・高官・豪商は興味を失い、貴顕紳士は出席せず、ごく少数の華族会員と地質学関係者がただ一方的に聴講して離散するだけの講演会になったのであろう。むしろそのような種々雑多な社会の話題に興味をもったのは、地理の先生方であったが、これは当時の協会の運営者からみれば、余計者であったかもしれない。

協会へ入会を承認された者は、明治三十年代には年間二名、退会二名ということもあり、会員は一五〇名前後であったが、四十年代から積極的によやす方針をとり、田健次郎・柳沢保恵・長岡外史・伊沢修二・吉井幸蔵・大森房

吉・長岡半太郎・竹内綱・上山満之進・岩田宙造・鎌田栄吉・徳川家達・松平頼寿・前田利為等々、華胄界、政界、学界いろいろの方面から知名人を集めて震災前には会員は三〇〇名に近くなった。もちろん大学の地質学科の卒業生や地理学の専攻者も、奏任官以上の地位になれば勧誘を受け会員となる者も少なくなかった。

中国地学調査 この事業の最初は地学雑誌の上でみるかぎり、明四三・九・一四の評議員会で「清国地理調査について積立金一五〇〇円を支出」する決議をしたことである。そして会員石井八万次郎⁽⁴¹⁾を地理地質調査のために特派することとし、同年一一・一一上海に向けて出発させた。石井は揚子江流域を調査して翌年四月帰国。総会(明四四・五・六)において報告し例会(同五・二〇)で講演した(明四四・九一二四集四五・一月号)。さらに同年一〇月の評議員会で調査に二か年、報告書の編纂に一か年の計画を立て予算一万七〇〇〇円を可決し、これを寄付金にまつこととし、一一月石井を再派した。しかしあたかも辛亥革命にあい調査が進まず、大一・八中旬、促して帰国せしめ協議したが案ならず、ついに一二月囑託を解き、この事業は挫折したかに見えた。

(41) 石井八万次郎、明二八の地質学科卒業生。台湾・朝鮮などで地質調査を行い明三一・七―三四・六に地学雑誌に四報告あり、その後、日清役後、清国政府顧問として鉱山調査を行い、漢口に滞在していたこともあり、地学雑誌(明三七・四―三八・一〇)に「南船北馬」と題してシナ事情・旅行談を連載したことがあった。当時、地質学者中、おそらく随一の中国通であつたのであろう。

寄付金募集のための趣意書は次の通りで、協会の意図を示している。

清国ハ本邦ト密邇シ地学上最重要ナル関係ヲ有シ、其研究ノ有益ナルコトハ論ヲ俟タザルナリ、然ルニ其疆土ハ広漠ニシテ文明ノ淵源甚ダ深ク数千年来ノ旧慣積習シ、随テ之カ探検研究ニ従事スルモノハ其概念ヲ知得スルニ往々一年有余ノ日子ヲ空

費ス、蓋シ清國ノ古典ニ関シテハ漢文ノ浩瀚ナル書籍アリ、近世ノ科学觀察ニ関シテハ英仏獨露等ノ各国語ニテ記述セル大小数多ノ報告アルモ、各種ノ出版物ニ散在シテ之ヲ獲ルニ難ク邦語ヲ以テセルモノニ至リテハ捫ルヘキモノ寥々タリ、是レ独リ本邦ニ於ケル科学上ノ大欠点ノミナランヤ

本会ハ茲ニ見ル所アリ、昨年新ニ會員ヲ特派シテ揚子江沿岸ノ調査ニ従事セシメタリ、蓋シ本会ノ責務トシテ清國ニ於ケル調査ヲ施行シ清國ノ古書ト西洋ノ近著トヲ参照シ本邦人ノ蒐集セル材料ヲ加ヘ、旅行家探検家并ニ日清商工業者ノ清國ヲ研究スルニ当リ指針タルヘキ地学ニ関スル書籍并ニ地圖ヲ発行シ、今後清國ヲ觀察スルモノヲシテ科学的基礎ニ抛ラシメントス
今ヤ昨年来調査セル資料ニ基キ報告編纂中ニアリト雖モ、調査ノ日子僅々五ヶ月ニ過キサリシヲ以テ其結果甚ダ不完全ナルヲ免レス、即チ更ニ三ヶ年ヲ期シ稍精密ナル調査ヲ施行シ前条ノ目的ヲ達セント欲ス、是レ本会ノ特ニ支那調査ヲ企画セル所以ナリ
明治四十四年十二月 東京地学協会

前項ノ目的ヲ達センカ為メ要スル調査費用ハ評議員会ニ於テ寄付金ヲ以テ之ヲ支弁スルコトニ決セリ、冀クハ會員諸君ニ於テ応分ノ御寄付アラントヲ

これが明四四・一二月号に発表されると、直ちに鍋島直大侯、徳川頼倫侯から各五〇〇〇円の申込があり、他の會員よりも五〇円ずつの申込一五件が名をつらねている。この趣意書と寄付申込者の氏名金額が三十四年も毎号出ているが、大口は後に中村是公五〇〇〇円がふえただけで変わらず、大五・二の最終表では五〇〇〇円は上記三名、二〇〇〇円一名、五〇〇円二名、ほかに五〇〇円から三円までが三六名で、全額で一万九八二三円に達した。石井の調査を中止させて呼び返えす少し前に、別に地質調査所より中国へ出張を命ぜられた野田勢次郎・飯塚昇に協会よりも調査を囑託した（大一・九一・大二・三）。次にこの兩人には協会が自力で二回（大二・一一―大三・七、大三・一〇―大四・五）

派遣して調査せしめたが、同時にその後地質調査所より出張の小林儀一郎、堀内米雄、山根新次、川中甲吉、福地信世、杉本五十鈴らにも調査を囑し報告書と地図（地質図）の作成を求めた。

(42) 辛亥革命で足止めされた石井に調査を中止させ、呼びもどしたのは八月中旬、野田が地質調査所より清国出張を命ぜられたのは七・一、協会より調査を囑託されたのは七・二八である。

これらの調査結果は最初の協会自力のものは石井の『揚子江流域』（大ニ・九刊、三四五ページ・付録六二ページ）と野田の『中支那及南支那』（大六・二刊、四四四ページ）の二となった。前者は本文を水誌、山誌、地質及地質構造、鉱物及鉱業、産業とするも、地質と鉱山業を中心とし、付録として旅行、人情風俗、風景雜説の中国事情を記し、案内風になっているのは石井の長年の在留の産物であろう。これに対して後者は地形（山系・水系）、氣候、住民（分布・地方語・風俗）、人口及都邑、交通、産業とやや地理書風になっている。

最終報告『支那地学調査報告』は本会派遣員のもを第一巻、地質調査所より出張せる本会囑託員のもを第二巻として大正六年に出版した。各担当者の地域ごとに、総説（区域・地形・地質）と地学巡見記をしるす。この巡見記については井上主幹の巻頭言によれば「視察シタル事項ヲ細大漏ラサス記載シ将来ノ参考資料トナサンガ為メニハ、巡見記ニヨルヲ最モ可ナリト思惟シタレバナリ」という。

この事業は最初は清国地理調査として発足し、次に地理地質調査と書かれ、最後には支那地学調査となっている。すなわち発足時は前述の趣意書にあるごとく浩瀚なる古典漢籍のほかに、中国を実踏してリヒトホーフエンやウイリスらの近世西欧各国の科学的觀察に、本邦人の集めた材料を加えんことを企てたもので、「旅行者や日清商工業者の

指針たるべき」書籍と地図とを作ろうとしたのである。それが地質調査となったのは、一つには踏査に二年三年をかけられる地理学者が当時日本に居らず、また当時の地理学自体が地質学とちがって、その研究領域や方法を明確にしておらなかったこと、第二には地質調査所のメンバーを実質的中核とする地学協会の体質から、地質学を中心とする地学の伝統的考え方に立っていたこと、したがって地質学的旅行者としての嘱目の一切を記述する「地学巡見記」が地理であり得たのである。

(43) 『支那地学調査』の報告書の扉には英文も書かれていて、'Geographical Research in China, 1911-16' とあり、執筆者名の上には「地学」Geography とある。明一〇—三〇に導入使用された「地学」が、井上主幹には Geography であり、同時に Geology であったのである。(前稿、七七ページ、注42参照)

日露役前後から第一次大戦時にかけては、地質調査所の技師が相ついで中国に出張調査している。地学協会の最初の石井八万次郎の出張は広範な地理的情報をまとめることであつたが、これが頓座すると協会の副会長花房子爵、評議員和田維四郎の尽力で、「農商務省に依頼して調査員を派遣することを得」⁽⁴⁴⁾るようになって、調査が遂行されたのである。ただこれをまとめるにあたっては地質調査所としては地質、とくに鉱山・鉱床に重きをおいて、地質要報や「支那地質鉱物調査報告書」に記載し、協会は地質を中心とはするが、より広範な地理的記述にも心掛けるといふ状況で『支那地学調査』の報告書二巻ができた。

(44) 井上禧之助、故副会長花房義質、地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五、一〇

(45) 野田勢次郎、中支那及南支那地学調査の回想(自大正元年至同四年)、地学雑誌、協会九〇年史号、一九六九、六

この中国地学調査の事業は井上主幹が終始、統轄して運営したが、その淵源は明三五の和田維四郎の中国鉱物資源調査であろう。おそらく協会の評議員としても地質調査所長和田と現所長井上とが話し合い、それに貴族院に籍をおく何人かの会員が後押ししたのであらうと推測する。

和田が製鉄所長官を罷めたときの事情から、農商務省は明三五・二和田の希望する必要調査費を出したので、華北・華中を三区に分けて調査団を派遣し、自らも小川琢治・金原信泰二技師を同行して華北を巡遊した（小川、一地理学者之生涯に詳しい記述がある）。和田はその後も大陸の資源調査につき関心を失わなかったので、明四五協会の事業が進捗しなくなると、井上所長とともに政府に働きかけたのであらう。第一回の地質調査所よりの出張者であり、また石井八万次郎（二回）につぐ第三・第四回の協会の派遣員である野田勢次郎の談によると（地学雑誌、協会九〇年史号）、若い技師には調査所と協会との関係はわからないが、井上所長の命令のままに行ったという。

井上の記述によると『支那地学調査』第一巻巻頭、協会の派遣した調査員（石井二回、野田二回）の費用は一万九千円（これは前述の寄付金とほとんどである）、地質調査所その他の嘱託調査員の費用は六万円、報告書の編集・印刷費は二万円で、合計は十万円をこえるところである。しかし協会は明三六類焼して借入金七〇〇〇円あり、役員会・編集会の費用も各自負担するという節約ぶり、明四一末によく少額の剰余金を得、その後毎年一〇〇〇〇円の積立金をし、大四に六〇〇〇円になって会館を増築修繕したという財政状態であった。（井上、地学雑誌、五〇〇号記念号、昭五）。したがって嘱託した調査員の費用六万円は日本政府なり会社なりの出した出張費の概算であらうか。

(46) 『支那地学調査』の報告書はこのほか、第三巻（古生物調査及化石図譜、大九）、地形図及地質図第一帙（一七枚、大六）、

第二帙（九枚、大六）よりなる。これらの内容については、地学雑誌、協会九〇年史号参照。なお協会は引きつづいて華北、満蒙、北カラフト、シベリア方面に旅行する地質調査所その他の地質学者約四〇名に調査を囑託し、南支那全図、南支那地質図（大九）、北支那全図、北支那地質図（大一二）、東亜地質図（昭四）などを出版した。

経費の出所はどこであろうと、井上のいう通り「此ノ事業ハ実ニ学术界ノ大事業ト称スベク、此報告書ハ支那ノ地学ヲ研究スルモノノ拠ルベキ唯一ノ参考資料タルベキヲ信ズ」るに足るものといえよう。日本帝国の大陸政策の一端を荷うものとはいえ、中国の地質を論じ地質図を提供したのもとして、科学上の価値は国際的にも決して小さくはなかった。

野田は「本調査事業は地質調査所の協力を主体とし、其資料を協会に提出した」ものであるが、「（地学）巡見記こそは地学協会独特の記事というべき貴重なものであり、又調査者の大なる努力というべきである」（協会九〇年史号）と述べている。

地学巡見記は地理学の記述とはいえないが、中国の田舎を歩いた記録としては類をみない。おそらく当時、日本人として中国の田舎道をもっとも多く歩いたのは売薬行商人であつたであろうが、これは頭も筆もなかったので、何も残さなかつた。この点、地質学者は地質図を作成するために何百里という行路の沿線を観察したので、従前も、またその後も、普通の学者研究者の出入らぬところまでも歩いている。たださらに少しく中国の社会経済の組織・制度に関心ないし素養があつたらという望蜀の念を禁ずることができない。

震災前後 第四期の末期からその直後の状況を一瞥しよう。第一次大戦の中ごろまでの地学雑誌は、例によって地

質調査所報文の転載が多いが、大戦末期から減って、論説は講演筆記と寄稿と半々ぐらいになる。世界大戦という大変動期についてヨーロッパの変貌を政治・経済・民族等の諸事情につき、また日本の社会や経済についても、各方面の人の講演がある。シベリア出兵に従軍した地質学者の浦塩とかチタ付近の地質、東部シベリアの鉱床などという論説や雑録もある。講演筆記は読んで冗長な感じがするが、これは地学協会の『協会報告』以来の伝統だから止むを得ない。講演以外の寄稿は地質・鉱床・鉱物・地形・地震噴火などが主である。大い〇ごろから雑録・雑報は数も多くなり内容もやや多彩になるのは執筆者の層が厚くなったからであろうか。そのなかで地理学に関係するもの、西欧雑誌からの抄記なども前掲のように出はじめているが、地質学関係のものに較べれば問題にはならない。

「地質学方面の材料が相当豊富なるに反して、地理学の論文が思う様に得られないという欠陥を感じた。幸に田中子爵が此の方面の資料を供給されて地学協会の機関雑誌としての体面を糊塗し得たとはいへ、遺憾な点が何時も此に在った」(小川、五〇〇号記念号)

これは小川が編集委員であった明治末までのことをいっているのかもしれないが、実はその後も同様であったのである。小川以外に Geographical Society とか Journal of Geography ということを考えた主幹や編集委員はついにいなかった。日本語の「地学」という言葉で明治二〇—三〇年代の感覚しか持たれていなかった。

こういうときに大一二・九・一の関東大震災が起きて、京橋区木挽町にあった地学協会は会館と蔵書資料の一切を失ってしまった。協会は一時、井上主幹宅(芝区白金)に出張所をおいて事務をとり、地学雑誌は二か月休刊、十一月になって九・一〇・一一月合併号を出した。以後、定期的に刊行されたが協会はすべてを失い、庶務は地質調査所

の職員によって行われ、ついに大一・六には定款を変更して事務所も調査所内に移してしまった。そうでなくてさえ、調査所の影響が強かったのに、今は全く調査所の付屬機關の觀を呈するにいたり、ここに明一二、雄勁な主張をもって創立してから、とにかくにも四十数年を歩んできた地学協会も、その使命を終ったかにみえた。

もともと地学雑誌の読者は、身分資格をやかましくいう三〇〇名余の会員（震災後は大減少した）だけでなく、むしろ熱心なのは会員外の購読者ではなかったであろうか。それはおそらく全国の中学校の地理や博物科の先生、またその検定試験の受験者であつたろう。大正中ごろから地理研究者・教育者の増加、それに伴い新しい地理学刊行物への要望があつた。

地学雑誌は地学会発行時代、読者たる小中学校の先生に対する質疑応問、講義の連載があつたが、明二九―三三には「商業地理門」、明四一以後は「地理教授資料」という欄を設けて、教材となるようなものを載せ、また毎年、中学校教員検定試験問題を掲げ擬答を与えて便に供したりした。前記のような三〇〇名の会員は、各界の名士の講演筆記は読んでも、これらの教材的なものは会員外の購読者用のものであつたであらう。

もしそうであつたとしたら、また第一次大戦後期あたりから、地理・博物科の教師用教材提供をかねて、多少の研究をのせる刊行物が出はじめていることを考えると、地学協会は設立の趣旨を検討して、本来の方針を貫徹するか、新たな目標を立てるか、それによって地学雑誌のあり方に検討を要したのであらう。然るにそのような反省もないままに旧態依然としていたところに、震災という壊滅的打撃を受けたのが、地学協会の悲劇であり、地学雑誌の指導的存在意義が失われた理由である。

創刊当時、地学雑誌は地学すなわち地質学・地理学・鉱物学の雑誌であり、やがて明治三十年代後半になると鉱物学は脱落したが、地理学をはじめは地球表面の状況を研究するものとして、もっぱら自然の記述記載を行っていた。また地球表面のこととして人間社会、とくに国家の自然的外面的記述がただ漠然と自然の記載と平行して、行われていた。

しかし西欧においては近代地理学の祖といわれるフンボルトやリッターの歿後（一八五九年）になると、地理学はもはや宇宙学・地球学というようなものからはなれ、また地質学あるいは国状学・商品学などもちがった分野を追求するようになり、十九世紀後半から二十世紀初めにかけて、いくつかの流れが出ている。しかし日本ではそういう学説見解については、片鱗だけに正しくは伝えられず、ただ名前だけが流布されたという観がある。

それは一に地理学の研究者といわれるものが大正時代になっても全国に数えるほどしか居らず、しかもその関心は教育に向けられていたことを否めない。当時、地理に関係ある者といえば、小中学校の教師であったし、中学校教師を供給する高等師範学校（東京、広島、東京女子、奈良）が研究機関としても有力で、高等商業学校（東京、神戸、その他）は活発でなく、大学（東京、京都）の地理学講座は明治四十年代にできただけで専攻の学生はほとんどいなかった。これらの国立諸学校にくらべ私立学校はさらに弱体であった。

そういう状態であったから地理学研究のための全国的組織はもちろん、地方的な組織さえなく、地理学のために刊行される雑誌もなかった。地学協会や地学雑誌は本稿にみたように、このためにはあまり役立たず、それには次の震

災後の時代をまたねばならなかったのである。

おわりに　本稿は当時、地理学も関係していた唯一の雑誌としての東京地学協会の地学雑誌を、地理学の立場からみたものである。東京地学協会ならびに地学雑誌の活動は地理学のみでなく、むしろより大きな部分は他にあったから、本稿は東京地学協会、地学雑誌の批判をする目的でなく、いわんや批難をする意志は微塵もない。

二、本稿の主な資料は地学雑誌および東京地学協会の出版物であって、すべて文字に表わされたものばかりで、私が体験を通じて知っていることは全然ない。本稿中に名の出ている各位先生のうち、直接、しばしば警咳に接し垂教を蒙ったのは山崎直方先生と井上禧之助先生であり、それもずっと後年のことで本稿で取扱っている期間のことではない。ほかに佐藤伝蔵、田中阿歌麿、小川琢治、金原信泰の諸先生にはお話申したこともあるが、記憶にもとめておられないだろうという部類に入る。

諸事実の説明や個人の感想・回顧はまことに少なく、わずかに小川琢治先生のメモワール「一地理学者之生涯」があるが、日露役従軍で中絶しており、ほかには地学雑誌の五〇〇号記念号（昭五、一〇）、協会九〇年史号（昭四四、六）の二つにすぎない。

したがって所論中、見当ちがいの推測や過誤があるかもしれない。叱正を得て今後の訂正に俟ちたい。

（七〇、九、四稿了）